



公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

ファカルティ・ディベロップメント 報 告 書 2025

2026 年 3 月

F D 部会

はじめに

2025 年度 FD 部会は、学部新設やセンター再編に伴い、新たな部局からも委員の先生にご参加いただいて体制を整え、着実に教育改善活動を実施した。FD 部会が取りまとめた 2025 年度授業評価アンケートの総合評価項目のポイントは全学平均 3.58 であり、中期計画に掲げている目標値である 3.5 以上を達成した。また、部局ごとの平均でも概ねこの目標を達成している。一方、詳細な項目に目を移すと 3.5 を下回る項目も見受けられることから、授業公開などを通じた教員間の意見交換や学生からの評価の集計分析など、FD 部会として教員の教育改善を後押しできる体制の整備に今後も取り組む必要がある。

また本年度は、このような取り組みの一環として、学生の要望を速やかに授業に反映させることを目的とした、新たな仕組みの導入を行った。具体的な文言の調整、情報の取り扱い方など運用にあたってのルールについて各部局 FD 委員を中心に慎重に議論を重ねた結果、2025 年度後期から全学的な取り組みとして「学期途中の授業に対する要望フォーム（試行）」の運用を開始するに至った。最終的に 8 件の要望を受け付け、担当教員の協力によって全て適切に対応することができた。フォームの周知やつぐみ意見箱との差別化、本来の意義にそぐわない要望への対処など、いくつかの課題が浮き彫りになったが、2026 年度からは修正を加えた上で本実施へと移行することが決まっている。今後は、この仕組みの効果的な運用を目指して議論を積み重ねていく。

一方、2024 年度 FD 報告書に課題として挙げられた教学 IR については、本年度の FD 部会では十分に議論することができなかった。しかし、現在の FD 部会で行なっている活動内容（授業評価アンケートなど）も教学 IR の要素の一つである。また、生物資源学科と海洋生物資源学科では教育プログラム（日本技術者教育認定機構（JABEE）が認定する国際水準の技術者教育プログラム）を通して学生の成績、アンケート、学習到達目標の達成度などのデータを取りまとめて、学生・教員双方に対して教育の現状を可視化しており、教育改善に活用している。このような各部局独自の取り組みや、他大学の実施例を参考にしながら、FD 部会として引き続き教学 IR への理解を深めていく必要がある。

最後に、本部会の運営にご尽力くださった各部局 FD 部会委員の先生方、授業評価アンケートの企画・運営や会議の準備、本報告書の整理・編集などにご尽力いただいた教育推進課の皆様へ深く感謝いたします。

2026 年 3 月

2025 年度 教育研究委員会 FD 部会 FD 部会長 高尾祥丈

目 次

はじめに	i
1. 活動概要	1
1. 1 委員の構成	1
1. 2 事業の実施状況	1
1. 2. 1 授業評価	1
1. 2. 2 授業公開	15
1. 2. 3 F D 研修	15
1. 2. 4 実施要項	15
2. 各部局のF D活動	
2. 1 経済学部	
2. 1. 1 授業評価	18
2. 1. 2 ゲスト招聘授業と公開授業	20
2. 1. 3 授業改善についての課題と展望	24
2. 2 生物資源学部	
2. 2. 1 授業評価	26
2. 2. 2 授業公開の方針と実績	27
2. 2. 3 授業改善活動についての課題と展望	32
2. 3 海洋生物資源学部	
2. 3. 1 授業評価アンケート	33
2. 3. 2 授業公開	33
2. 3. 3 授業改善についての課題と展望	34
2. 3. 4 県内就職率向上への取り組み(外部講師招聘)実績	35
2. 4 看護福祉学部	
2. 4. 1 授業評価	36
2. 4. 2 F D 研修	38
2. 4. 3 授業公開	39
2. 4. 4 授業の要望フォームについての結果	41
2. 5 恐竜学部	
2. 5. 1 授業評価	42
2. 5. 2 授業公開とゲスト招請授業	42
2. 5. 3 授業改善についての課題と展望	43
2. 6 情報センター	
2. 6. 1 アンケート結果と授業評価	44
2. 6. 2 F D 活動	47
2. 6. 3 授業改善の取り組み	48
2. 7 国際センター	
2. 7. 1 授業評価アンケート	52
2. 7. 2 授業公開	53
2. 7. 3 授業改善の取組と今後の展望	53
2. 8 地域連携センター・共通教育センター	
2. 8. 1 授業評価アンケートの結果	54
2. 8. 2 授業公開の方針と実績	55
2. 8. 3 F D 研修	56
2. 8. 4 授業改善の取り組みと今後の展望	57

1. 活動概要

1.1 委員の構成

2025年度のFD部会メンバーは、以下の教員である。

2025年度FD部会委員等名簿

氏 名	所 属	職	役 割
高 尾 祥 丈	海洋生物資源学部	准 教 授	部 会 長
渡 邊 敏 生	経済学部	教 授	委 員
丸 山 千 登 勢	生物資源学部	准 教 授	委 員
岡 田 隆 志	看護福祉学部	教 授	委 員
高 田 裕 行	恐竜学部	教 授	委 員
三 橋 浩 志	地域経済研究所 (地域政策学部)	教 授	委 員
田 中 武 之	情報センター	准 教 授	委 員
渡 邊 綾	国際センター	准 教 授	委 員
森 本 康 太 郎	地域連携センター	准 教 授	委 員
木 村 小 夜	共通教育センター	教 授	委 員
水 田 尚 志	海洋生物資源学部	教 授	(オブザーバー) 教育研究委員長

1.2 事業の実施状況

1.2.1 授業評価

実施要項、実施概要、質問および回答用紙、全体集計結果、経年特性（前期、後期）を次頁より掲載する。

令和7年度 学生による授業評価の実施結果

(前期) 実施期間 令和7年7月1日(火)～7月25日(金) (ただし授業の都合等により一部期間外実施)

調査票対象・回答状況

<学部>	回答数	対象数
経済学部	1,516	4,993
生物資源学部	347	1,014
海洋生物資源学部	405	1,483
看護福祉学部	774	2,433
恐竜学部	39	119
情報センター	391	733
国際センター	844	2,003
地域連携センター	211	374
共通教育センター	1,667	3,417
計	6,194	16,569

<大学院>	回答数	対象数
経済・経営学研究科	24	28
生物資源学研究科	21	81
看護福祉学研究科	12	16
健康生活科学研究科	0	0
計	57	125

参加教員

<学部>	実施人数	実施率
経済学部	25 人	92.6 %
生物資源学部	18 人	100.0 %
海洋生物資源学部	21 人	95.5 %
看護福祉学部	27 人	96.4 %
恐竜学部	3 人	100.0 %
情報センター	5 人	100.0 %
国際センター	4 人	100.0 %
地域連携センター	3 人	100.0 %
共通教育センター	9 人	100.0 %
地域経済研究所	1 人	100.0 %
非常勤講師	42 人	79.2 %
計	158 人	91.3 %

<大学院>	実施人数	実施率
経済・経営学研究科	2 人	100.0 %
生物資源学研究科	5 人	83.3 %
看護福祉学研究科	2 人	100.0 %
健康生活科学研究科	0 人	0.0 %
非常勤講師	1 人	33.3 %
計	10 人	76.9 %

参加科目

<学部>	実施科目	実施率
経済学部	48 科目	87.3 %
生物資源学部	21 科目	87.5 %
海洋生物資源学部	29 科目	96.7 %
看護福祉学部	44 科目	81.5 %
恐竜学部	3 科目	100.0 %
情報センター	15 科目	88.2 %
国際センター	51 科目	85.0 %
地域連携センター	7 科目	100.0 %
共通教育センター	59 科目	92.2 %
計	277 科目	88.2 %

<大学院>	実施科目	実施率
経済・経営学研究科	4 科目	100.0 %
生物資源学研究科	6 科目	66.7 %
看護福祉学研究科	2 科目	100.0 %
健康生活科学研究科	0 科目	0.0 %
計	12 科目	80.0 %

令和7年度 学生による授業評価の実施結果

（後期）実施期間 令和7年12月22日（月）～ 令和8年1月26日（月）

（ただし授業の都合等により一部期間外実施）

調査票対象・回答状況

<学部>	回答数	対象数	<大学院>	回答数	対象数
経済学部	888	4,462	経済・経営学研究科	23	53
生物資源学部	224	944	生物資源学研究科	12	64
海洋生物資源学部	346	1,493	看護福祉学研究科	8	8
看護福祉学部	340	1,607	健康生活科学研究科	0	0
恐竜学部	51	102			
情報センター	43	128			
国際センター	553	1,413			
地域連携センター	136	395			
共通教育センター	917	2,961			
計	3,498	13,505	計	43	125

参加教員

<学部>	実施人数	実施率	<大学院>	実施人数	実施率
経済学部	23 人	79.3 %	経済・経営学研究科	2 人	66.7 %
生物資源学部	17 人	77.3 %	生物資源学研究科	3 人	42.9 %
海洋生物資源学部	14 人	82.4 %	看護福祉学研究科	1 人	100.0 %
看護福祉学部	17 人	85.0 %	健康生活科学研究科	0 人	0.0 %
恐竜学部	1 人	50.0 %	非常勤講師	2 人	50.0 %
情報センター	4 人	100.0 %			
国際センター	4 人	100.0 %			
地域連携センター	3 人	100.0 %			
共通教育センター	10 人	100.0 %			
地域経済研究所	1 人	50.0 %			
非常勤講師	28 人	70.0 %			
計	122 人	79.7 %	計	8 人	53.3 %

参加科目

<学部>	実施科目	実施率	<大学院>	実施科目	実施率
経済学部	68 科目	64.8 %	経済・経営学研究科	4 科目	80.0 %
生物資源学部	18 科目	66.7 %	生物資源学研究科	3 科目	30.0 %
海洋生物資源学部	19 科目	70.4 %	看護福祉学研究科	1 科目	100.0 %
看護福祉学部	27 科目	81.8 %	健康生活科学研究科	0 科目	0.0 %
恐竜学部	3 科目	100.0 %			
情報センター	5 科目	100.0 %			
国際センター	42 科目	85.7 %			
地域連携センター	5 科目	62.5 %			
共通教育センター	49 科目	80.3 %			
計	236 科目	74.2 %	計	8 科目	50.0 %

福井県立大学 授業に関する調査

本アンケートは以下の講義用です。アンケートに回答する前に確認してください：

○○学部・○○講義・○○氏名

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育をより良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号にチェックし、Q6については自由に記述してください。

本アンケートによる（全学、学部別等）授業評価結果は、本学ホームページ上で開示予定です。

回答を1回に制限するためgmailアドレスでログインしてもらっていますが、誰が記入したのかは分からない設定になっています。教員にはアカウントは通知されませんので、このアンケートの回答が成績に影響することはありません。

なお、アンケートの集計業務は、守秘義務契約を結んだ外部業者に委託しております。

@g.fpu.ac.jp アカウントを切り替える



共有なし

福井県立大学 授業に関する調査

@g.fpu.ac.jp アカウントを切り替える



共有なし

* 必須の質問です

授業に関する調査アンケート項目

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育をより良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号にチェックし、Q6については自由に記述してください。

Q1 この講義（課題、レポート、予習復習を含む）に意欲的に取り組みましたか？ *

- ☐ 1 意欲的に取り組まなかった
- ☐ 2 あまり意欲的に取り組まなかった
- ☐ 3 ある程度意欲的に取り組んだ
- ☐ 4 意欲的に取り組んだ

Q2 この授業についての方法（先生の講義の方法、話し方、資料の提示方法、学習支援システム・遠隔システムの活用など）はどうでしたか？ *

- ☐ 1 不適切である
- ☐ 2 やや不適切である
- ☐ 3 まあまあ適切である
- ☐ 4 非常に適切である

Q3 この授業の内容はどの程度理解できましたか？ *

- ☐ 1 理解できなかった
- ☐ 2 あまり理解できなかった
- ☐ 3 ある程度理解できた
- ☐ 4 理解できた

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか？ *

- ☐ 1 高まらなかった
- ☐ 2 あまり高まらなかった
- ☐ 3 少し高まった
- ☐ 4 高まった

Q5 この授業を総合的に評価してください *

- ☐ 1 良くない
- ☐ 2 あまり良くない
- ☐ 3 まずまず良い
- ☐ 4 良い

Q6 この授業について、その方法、教材、授業内容など、良かった点・悪かった点・気づいた点を自由に書いてください（この欄の記述に対する担当教員のコメントを、後日ウェブ上に掲載します）。

回答を入力

Q7 教員設定の質問・選択式（該当授業のみ）

- ☐ 1
- ☐ 2
- ☐ 3
- ☐ 4

Q8 教員設定の質問・記述式（該当授業のみ）

回答を入力

福井県立大学 授業に関する調査

@g.fpu.ac.jp [アカウントを切り替える](#)



共有なし

遠隔授業に関する調査アンケート項目

この科目を、完全に（または主に）遠隔で授業を受けた学生にお尋ねします。
あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号にチェックしてください。

遠隔で授業を受けなかった方は回答不要になります。そのまま次へ進んでください。

Q9 遠隔で行われた授業について、遠隔システムの活用（資料の提示方法、フィードバックのあり方等）はどうでしたか？

- ☐ 1 うまく活用されていない
- ☐ 2 あまりうまく活用されていない
- ☐ 3 まずまずうまく活用されている
- ☐ 4 うまく活用されている

Q10 遠隔で行われた授業について、学習の効果はありましたか？

- ☐ 1 効果がなかった
- ☐ 2 あまり効果がなかった
- ☐ 3 ある程度効果があった
- ☐ 4 効果があった

全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。
以下に、集計結果の見方を記す。

集計数	前期：回答された全てのアンケート 後期：回答された全てのアンケート
Q1 から Q5/Q9、Q10	アンケートの Q1 から Q5 並びに Q9、Q10 に対応
数値上段	平均値（質問は、4 件法）
数値下段	母標準偏差
集計方法	上段 回答選択肢「1、2、3、4」をそれぞれ「1 点、2 点、3 点、4 点」と得点化。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を示す。 下段 設問ごとに母標準偏差を求め、回答者の選択肢に対する偏り度合いを数値で下段に示す。但し、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。 「―」の欄は有効回答が無かったことを示す。
〔集計グループ〕	
全体	全ての集計対象者
部局別	科目の開講部局別に評価結果を集計
規模別	履修登録者数が「100 人以上」「100 人未満」別に集計

令和7年度 前期 学生による授業評価全体集計結果(学部生)

集計グループ	(集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価	Q9遠隔システム活用	Q10遠隔授業の効果
全体	(6194)	3.46 0.66	3.50 0.61	3.35 0.63	3.38 0.69	3.57 0.60	3.45 0.78	3.35 0.81
部局別 (6194)								
経済学部	(1516)	3.40 0.65	3.40 0.66	3.23 0.65	3.31 0.70	3.45 0.65	3.29 0.83	3.17 0.86
生物資源学部	(347)	3.27 0.70	3.40 0.67	3.14 0.67	3.15 0.78	3.48 0.69	3.39 0.69	3.29 0.72
海洋生物資源学部	(405)	3.34 0.63	3.46 0.61	3.29 0.63	3.37 0.70	3.55 0.62	3.52 0.70	3.46 0.70
看護福祉学部	(774)	3.61 0.63	3.61 0.56	3.41 0.58	3.55 0.62	3.69 0.51	3.60 0.68	3.52 0.66
恐竜学部	(39)	3.41 0.67	3.49 0.55	3.33 0.69	3.51 0.55	3.59 0.59	3.50 0.50	3.50 0.50
情報センター	(391)	3.40 0.67	3.56 0.56	3.29 0.62	3.23 0.71	3.53 0.61	3.63 0.63	3.49 0.72
国際センター	(844)	3.46 0.66	3.49 0.62	3.38 0.62	3.28 0.73	3.56 0.63	3.30 0.88	3.22 0.93
地域連携センター	(211)	3.54 0.74	3.59 0.62	3.55 0.62	3.56 0.72	3.65 0.63	3.48 0.78	3.52 0.75
共通教育センター	(1667)	3.51 0.66	3.55 0.57	3.45 0.59	3.48 0.64	3.66 0.53	3.49 0.77	3.40 0.82
規模別 (6194)								
100人以上	(1849)	3.41 0.66	3.44 0.64	3.30 0.64	3.34 0.69	3.50 0.63	3.42 0.76	3.32 0.78
100人未満	(4345)	3.48 0.66	3.53 0.60	3.37 0.62	3.40 0.70	3.60 0.59	3.46 0.79	3.36 0.83

令和7年度 前期 学生による授業評価全体集計結果(大学院生)

集計グループ	(集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価	Q9遠隔システム活用	Q10遠隔授業の効果
全体	(57)	3.70 0.53	3.68 0.46	3.44 0.53	3.68 0.46	3.74 0.44	3.63 0.60	3.65 0.56
部局別 (57)								
経済・経営学研究科	(24)	3.75 0.52	3.58 0.49	3.42 0.57	3.75 0.43	3.71 0.45	3.50 0.72	3.52 0.66
生物資源学研究科	(21)	3.57 0.58	3.76 0.43	3.52 0.50	3.62 0.49	3.76 0.43	3.73 0.44	3.80 0.40
看護福祉学研究科	(12)	3.83 0.37	3.75 0.43	3.33 0.47	3.67 0.47	3.75 0.43	3.75 0.43	3.67 0.47
健康生活科学研究科	(0)	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —

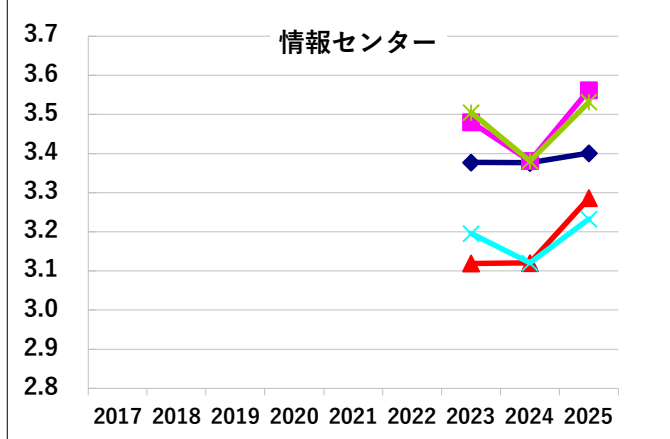
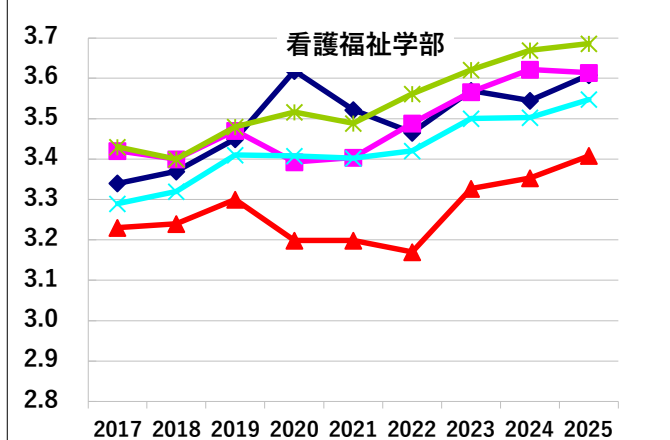
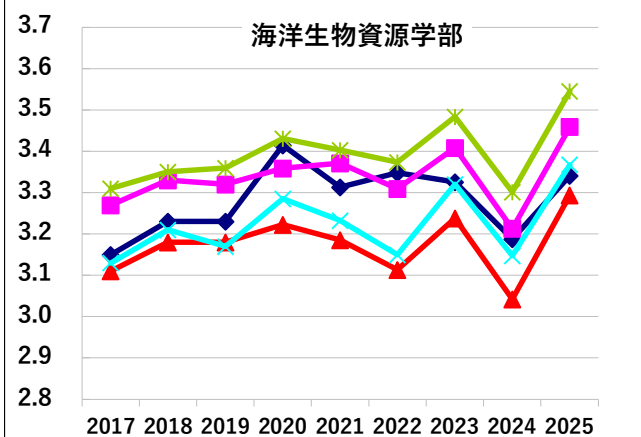
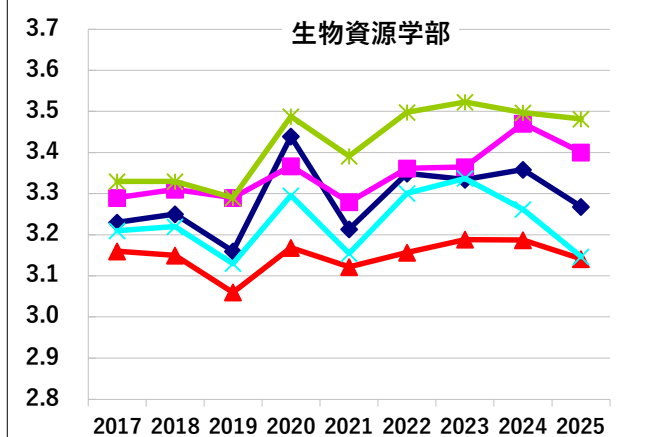
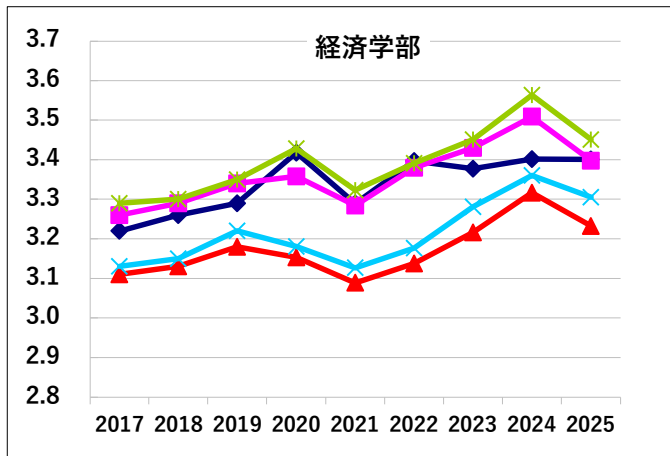
令和7年度 後期 学生による授業評価全体集計結果(学部生)

集計グループ (集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価	Q9遠隔システム活用	Q10遠隔授業の効果
全体 (3498)	3.45 0.65	3.52 0.60	3.35 0.60	3.40 0.69	3.59 0.58	3.47 0.74	3.39 0.76
部局別 (3498)							
経済学部 (888)	3.42 0.64	3.48 0.59	3.31 0.58	3.39 0.66	3.56 0.58	3.34 0.78	3.24 0.79
生物資源学部 (224)	3.21 0.72	3.41 0.67	3.17 0.65	3.16 0.74	3.50 0.64	3.46 0.85	3.38 0.87
海洋生物資源学部 (346)	3.27 0.66	3.49 0.59	3.20 0.63	3.30 0.74	3.52 0.60	3.46 0.71	3.37 0.76
看護福祉学部 (340)	3.63 0.54	3.61 0.52	3.42 0.54	3.58 0.58	3.72 0.46	3.63 0.59	3.60 0.61
恐竜学部 (51)	3.51 0.64	3.45 0.57	3.20 0.44	3.63 0.56	3.63 0.52	3.33 1.01	3.13 1.15
情報センター (43)	3.40 0.53	3.49 0.59	3.21 0.82	3.21 0.63	3.53 0.58	3.71 0.45	3.59 0.49
国際センター (553)	3.41 0.68	3.43 0.67	3.30 0.61	3.22 0.75	3.47 0.66	3.38 0.81	3.25 0.87
地域連携センター (136)	3.57 0.70	3.43 0.65	3.38 0.61	3.45 0.71	3.51 0.61	3.33 0.75	3.41 0.63
共通教育センター (917)	3.53 0.64	3.62 0.54	3.49 0.56	3.55 0.62	3.71 0.49	3.55 0.70	3.51 0.68
規模別 (3498)							
100人以上 (1025)	3.41 0.66	3.52 0.58	3.33 0.60	3.37 0.66	3.58 0.56	3.44 0.74	3.36 0.75
100人未満 (2473)	3.46 0.65	3.51 0.60	3.35 0.60	3.41 0.70	3.59 0.58	3.48 0.74	3.41 0.76

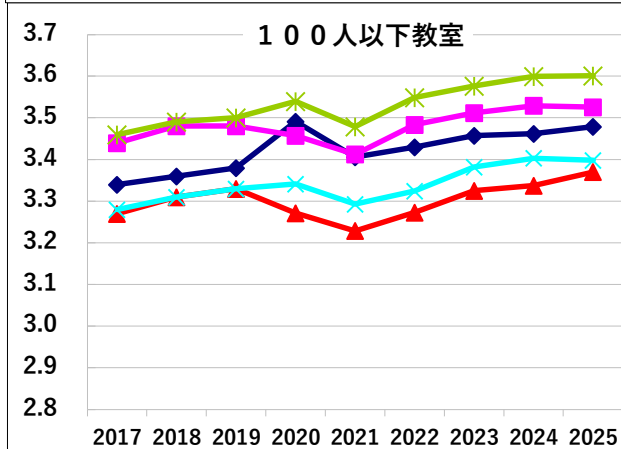
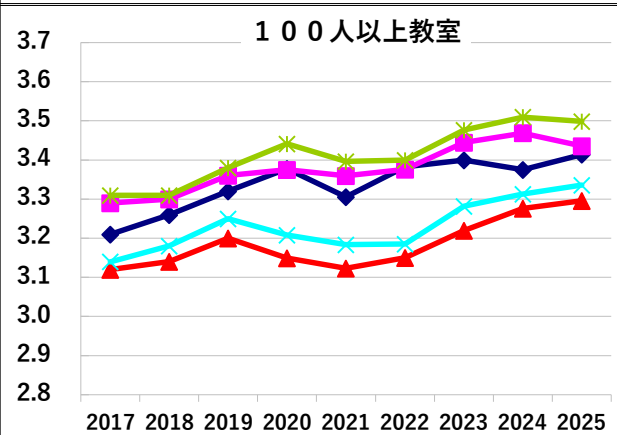
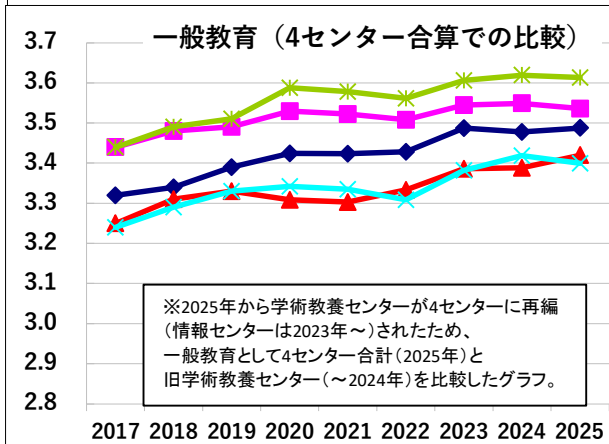
令和7年度 後期 学生による授業評価全体集計結果(大学院生)

集計グループ (集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価	Q9遠隔システム活用	Q10遠隔授業の効果
全体 (43)	3.81 0.39	3.84 0.37	3.65 0.48	3.79 0.41	3.88 0.32	3.76 0.42	3.69 0.46
部局別 (43)							
経済・経営学研究科 (23)	3.96 0.20	3.83 0.38	3.78 0.41	3.87 0.34	3.83 0.38	3.71 0.46	3.71 0.46
生物資源学研究科 (12)	3.50 0.50	3.83 0.37	3.33 0.47	3.67 0.47	3.92 0.28	3.90 0.30	3.60 0.49
看護福祉学研究科 (8)	3.88 0.33	3.88 0.33	3.75 0.43	3.75 0.43	4.00 0.00	3.71 0.45	3.75 0.43
健康生活科学研究科 (0)	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —

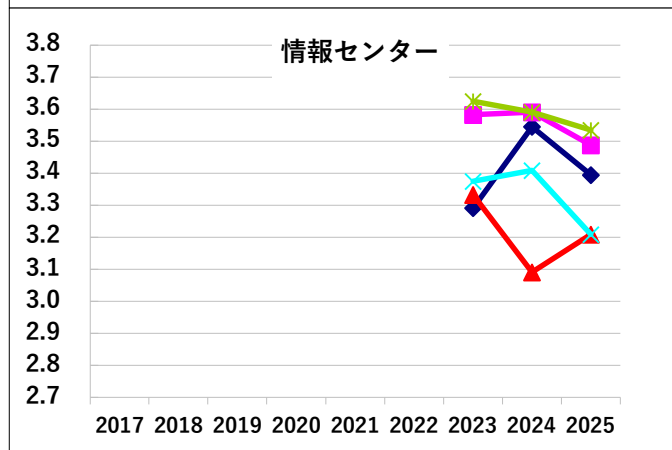
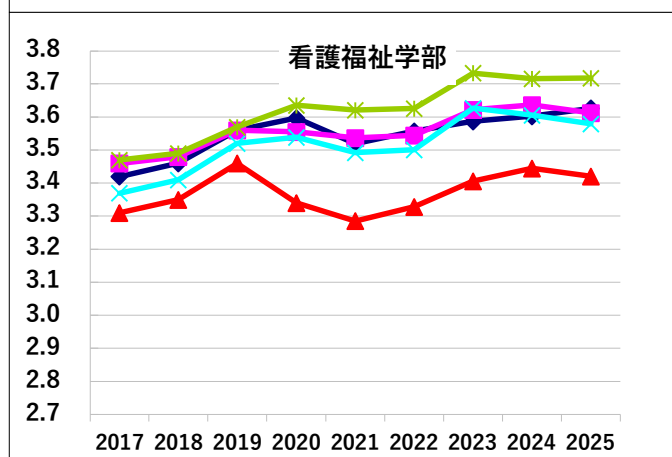
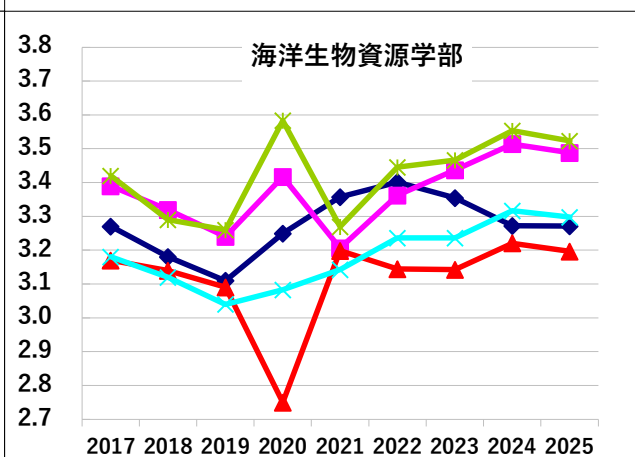
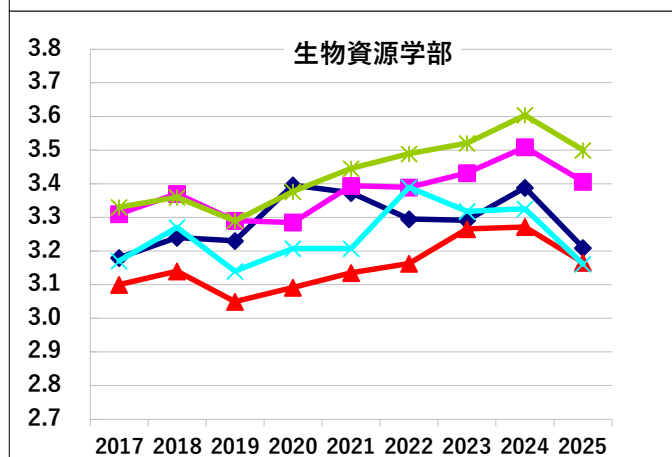
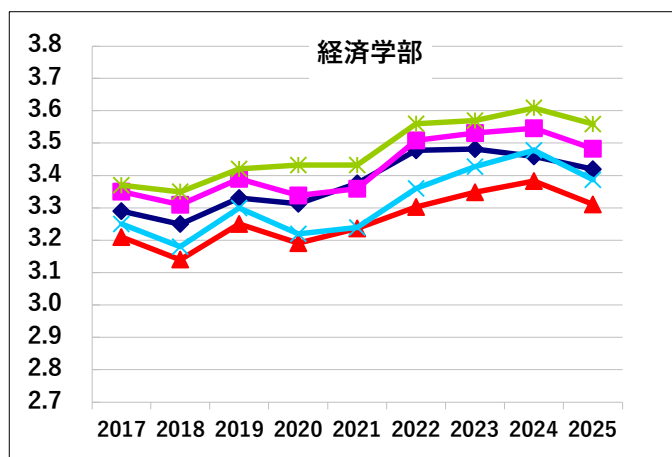
重要項目の経年特性（前期）



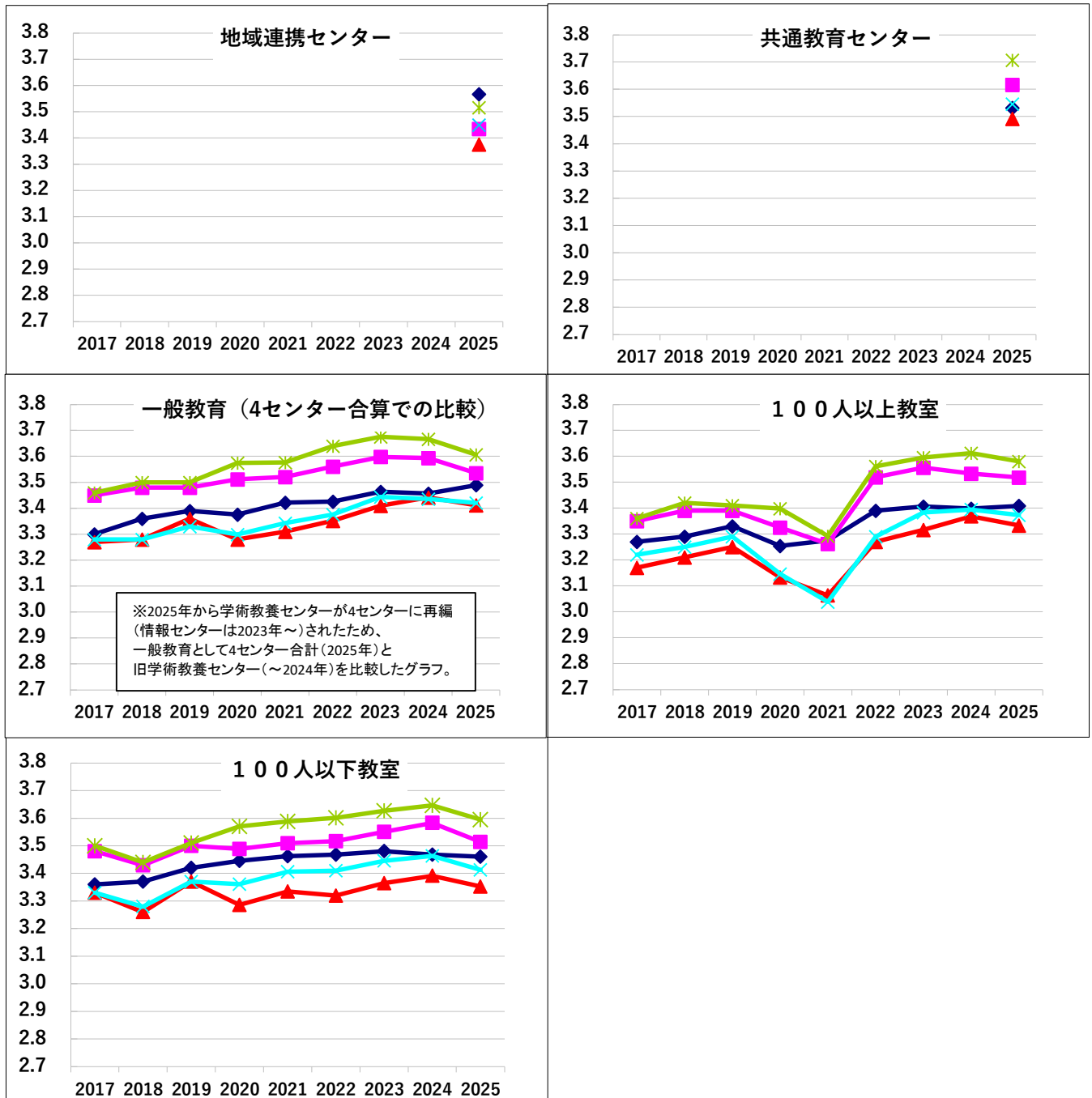
重要項目の経年特性（前期）



重要項目の経年特性（後期）



重要項目の経年特性（後期）



1.2.2 授業公開

詳細は2章「各部局のFD活動」にて報告する。

1.2.3 FD研修

全体研修は令和7年度は実施せず。各部局で行った研修は、2章「各部局のFD活動」にて報告する。

1.2.4 実施要項

福井県立大学学生による授業評価実施要項

1 目的

学生による授業評価を通じ、教員が授業の内容および方法の改善を図ることにより、教育力の向上に取り組む。

2 対象教員

専任教員および非常勤講師

3 対象学生

学部生、大学院生、科目等履修生・聴講生

4 対象授業

(1) から (3) を除く授業科目

ただし、(1) から (3) については、学部・学科および教員が希望する場合は実施することができる。

(1) オムニバス授業

(2) 実験、実習（指導）、論文（指導）、研究、卒業研究、演習教科

(3) 実施期間終了後の集中講義

5 期間

前期科目： 前期 期末試験期間前の2週間

後期科目、通年科目： 後期 期末試験期間前の2週間

集中講義は、原則、講義の最終日に実施する。

6 方法

(1) ウェブを用いたフォームへの入力によって実施する。

- (2) 事前の申請により、その他の方法でも実施することができる。
- (3) 特定部局で別途授業評価に関するアンケートを実施している場合、FD 部会での協議の上、それをもって FD 部会が実施する授業評価アンケートに代替することができる。ただし、この場合、下の 7 に示す項目と同等の設問を含んでいなければならない。

7 項目

評価は、下記項目について実施する。

- (1) から (5) については、4 段階評価とし、(6) については、自由記述とする。
- ただし、下記項目に加えて、教員が質問を設定することができる。

- (1) 受講の意欲
- (2) 授業方法
- (3) 内容の理解
- (4) 関心
- (5) 総合評価
- (6) 感想等

8 評価結果の取扱い

- (1) 評価結果の集計終了後、授業科目ごとの評価結果とあわせて、教員に送付する。
- (2) 教員はアンケート結果に対してコメントを付ける。ただし、コメントが学生を攻撃するような内容になっていないように配慮すること。
- (3) 評価結果、実施データおよびコメントは部局長の閲覧に供する。部局長は必要に応じて授業改善のための話し合いの場を設ける。
- (4) 当該科目の担当教員が承諾しかつ部局内で共有することがその部局で合意されている場合には、7 (6) 感想等の記載内容の共有を認める。
- (5) 評価結果は本要項の目的以外に使用してはならない。
- (6) 6 (3) により、特定部局で別途実施したアンケート結果の取扱いに関しては、当該部局が提供する授業に限り、当該部局で協議の上、その取扱いを決定することができる。

9 評価結果の公開

- (1) 評価結果の公開については、専任教員のみ、授業科目ごとの評価結果（授業科目名、教員名、質問毎の平均点）を学内 LAN 内のウェブページにて公開する。
ただし、7 (6) 感想等の記載内容については、公開しない。
評価結果の公開に当たっては、全体の集計結果についてもあわせて公開する。
- (2) 授業評価に対する専任教員のコメントを、学内 LAN 内のウェブページにて公開する。

- (3) ただし、6 (3) 特定部局で別途実施したアンケート結果の公開に関しては、当該部局が提供する授業に限り、当該部局で協議の上、公開の扱いを決めることができる。

【 附 則 】

平成26年 4月 1日 施行

平成27年 5月26日 改正 (期間)

平成29年 6月 7日 改正 (評価結果の取扱い)

令和6年 3月27日 改正 (実施方法及び他のアンケートの利用)

令和7年 3月25日 改正 (感想等の記載内容の共有)

2. 各部局のFD活動

2.1 経済学部（渡邊敏生）

2.1.1 授業評価

今年度の前期・後期における本学部、及び大学院の授業評価アンケートの結果は、表1の通りである。概ね高い水準にあると言えるだろう。しかし、前年度と比較をすると、Q1～Q5に関する評価の値が低下している。特に、前期において「授業内容」「授業方法」の評価が大きく低下しており、それに付随して「総合評価」も低下している。その原因として、例えば、1年生にとって前期は、入学したばかりで、大学での講義の対応に戸惑いながら、出席をしていた可能性がある。「高校の授業」と「大学の講義」では、そのスタイルは大きく異なる。教員はその違いを説明したり、また、学生も、1年生だけでなく、すべての学年において「(大学での) 学び方・学ぶ姿勢」について考える機会をもつ必要があるだろう。

遠隔授業については、その評価が低い水準ではないものの、去年よりも下がっている。コロナ禍に比べると、遠隔授業の数はかなり減っており、サンプル数も前年度と比べても少ない。そのため、評価が難しいところではあるが、これまでの経験を活かしながら、遠隔授業の適切な利用について今後も継続して議論していく必要があるだろう。

最後に、2017年以降の学部の授業評価の経年変化を見てみよう。全体的に緩やかな上昇傾向にあることがわかる。他方ですべての年度において「関心」や「内容理解」が相対的に低い水準に留まっていることも見てとれる。受講者の主観的評価とはいえ、「関心」を引きつけ、より一層の「内容理解」に繋げることが求められる。担当教員と履修生との断続的なコミュニケーションが必須となる。

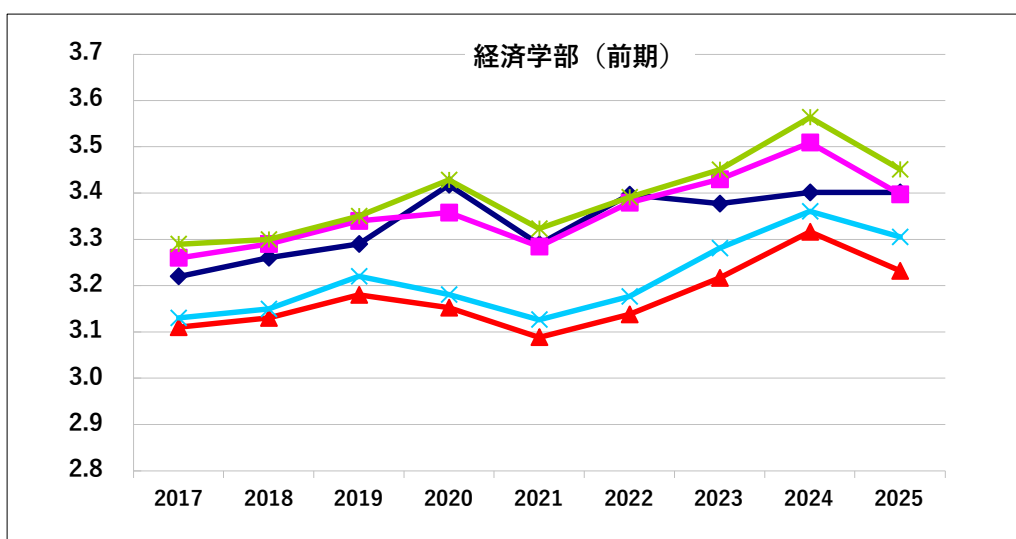
<表1-1> 授業評価の結果（学部）

学部	集計数	Q1 意欲的受講	Q2 授業方法	Q3 内容理解	Q4 関心	Q5 総合評価	Q9 遠隔システム活用	Q10 遠隔授業の効果
前期	1516	3.40	3.40	3.23	3.31	3.45	3.29	3.17
		0.65	0.66	0.65	0.70	0.65	0.83	0.86
後期	888	3.42	3.48	3.31	3.39	3.56	3.34	3.24
		0.64	0.59	0.58	0.66	0.58	0.78	0.79

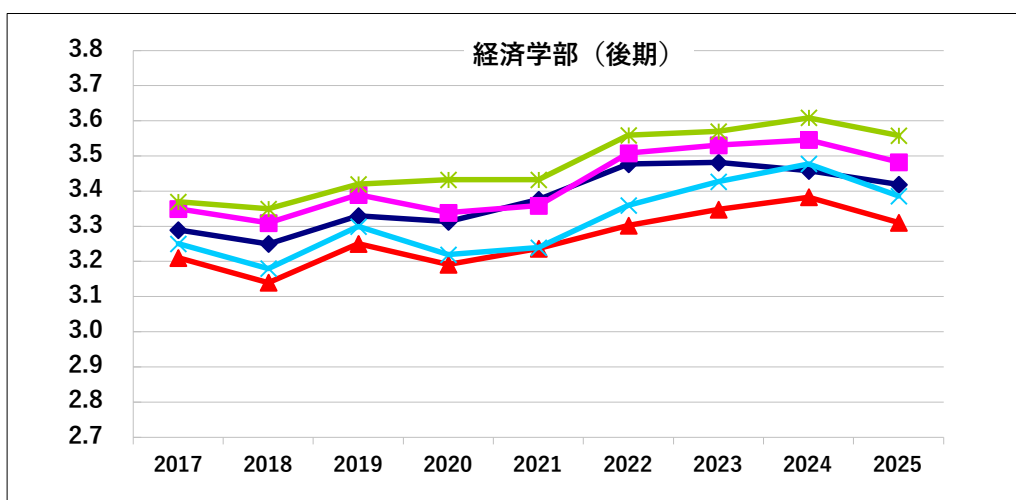
<表 1-2> 授業評価の結果（大学院）

大学院	集計数	Q1 意欲 的受講	Q2 授業 方法	Q3 内容 理解	Q4 関心	Q5 総合 評価	Q9 遠隔 システム活用	Q10 遠 隔授業 の効果
前期	24	3.75	3.58	3.42	3.75	3.71	3.50	3.52
		0.52	0.49	0.57	0.43	0.45	0.72	0.66
後期	23	3.96	3.83	3.78	3.87	3.83	3.71	3.71
		0.20	0.38	0.41	0.34	0.38	0.46	0.46

<図 1-1> 経年変化（学部・前期）



<図 1-2> 経年変化（学部・後期）



2.1.2 ゲスト招聘授業と公開授業

経済学部では、講義にゲストとして専門家や実務者を招くことで、ホットな話題を受講者に提供している。このような試みは、担当者の知見を超えた情報や知識をゲストに補ってもらうなど、様々な理由に基づいている。ゲスト講師の多くは、地元の企業や公共団体に所属しており、福井県の経済・社会事情に詳しい。ゲスト講師から提供される情報は、福井県内への就職を希望する学生にとって非常に有益なものである。

以下に、今年度の招聘実績を示す（順不同。これらは実施されたゲスト講義の全てを網羅している訳ではなく、いくつか漏れている可能性もある）。

また、経済学部では、専任教員による公開授業（授業参観）も行っている。自分以外の教員の講義を聴講し、講義レベル（内容など）を確認したり、教授方法を学んでいる。公開授業後には、講義の工夫や課題解決策に関する意見交換を行っている。2025 年度は 3 つの公開授業が行われた。

<表 2－1> ゲスト招聘授業

授業科目	担当教員	ゲスト講師	テーマ
日本経済史	池本裕行	小谷正典氏（福井県立大学特任講師）	
		山本祥平氏（福井県立大学特任講師）	
中国の企業と経済	加藤健太郎	菊野昭彦氏（福井新聞社みんなの新聞推進室長）	情報の収集と分析
		宮本和浩氏（日華化学株式会社常勤監査役（県大院 OB））	日華化学の海外展開の状況、海外駐在での経験
		木津浩史氏（福井県警察本部警備部課長補佐）	外国人犯罪、日本の経済安保対策（国内）、技術流出の経路・対策
		吉田陽介氏（北京理工大学外国語学院日本語教師（県大 OB））	中国の最新トレンド。中国の消費の変化、最新の中国事情
		山浦光一郎氏（ひかり法律事務所弁護士・元経済産業省模倣対策専門官）	日本の外国人政策

		笠原重久氏（国連貿易開発会議（UNCTAD）・元職員）	国際機関と戦後の国際秩序、中国・台湾の位置づけ
		渡辺敏広氏（鯖江市市民主役推進課長）	地方自治体の国際交流、外国人政策
		山崎俊信氏（村田製作所顧問）	海外事業、中国・台湾ビジネスの実態
〔演習Ⅰ、Ⅱ（中国経済論）〕	加藤健太郎	宮本和浩氏（日華化学株式会社常勤監査役（県大院OB））	台湾事情、台湾駐在の経験
		伊豆倉知美氏（クリエイトミライ キャリアコンサルタント（県大院OB））	女性のキャリアデザイン講座
地方財政論	桑原美香	北島遼生氏（坂井市総合政策部企画政策課主査）	どうする坂井市／若者を巻き込んだ地域課題の取り組み
演習Ⅰ/演習	桑原美香	杉山一弥氏（日本原子力産業協会フェロー）	エネルギー・環境・原子力問題について
		下郡けい氏（一般財団法人エネルギー経済研究所）	最近のエネルギー見通しと原子力の動向
外書講読	桑原美香	林田佳夏氏（株式会社ウラココミュニケーションズ）	福井 企業研究のススメ
農業経済学（経済学部）／農業経営論（生物資源学部）	堀田学	宮地雄大氏（JA 越前たけふ指導部営農販売課営農指導員）	JA の営農指導事業の実情について
		奥出佳那氏（丹南農林総合事務所農業経営支援部主事） 永木友也氏（永木農産マネージングディレクター） 沢崎 雄登氏（そまやまビレッジ株式会社 生産部門）	若手農業者の営業・活動の実情について

		小島佳彰氏（福井県丹南農林総合事務所・農業経営支援部・課長）	農業普及事業の実情について
農業生産・流通政策論（経済学部）・農業市場論（生物資源学部）	堀田学	橋本翔平氏（東京都中央卸売市場大田市場東京青果株式会社 総務部能力開発課） 中田秀樹氏（東京青果株式会社 販売部）	中央卸売市場の実情について
		村上圭子氏（広島県6次産業化プランナー）	6次産業化・食育支援の実情について
		福島暢人氏（城南地方卸売市場代表取締役）	地方卸売市場実情について
		鈴木裕子氏（元モンゴル大使館公邸料理人）	海外（モンゴル国）の食育・食品流通の事情について
マーケティング論	北島啓詞	岩井宏太氏（株式会社 ALL CONNECT）	アントレプレナーシップ教育（福井県庁産業労働部）
		株式会社 SCSK	IT とアジャイル
経営組織論Ⅱ	北野康	林治克氏（福井コンピュータ元社長、福井県立大学特任講師）	管理職のフォロワーシップについて
		加納香緒里氏（福井新聞社）	管理職のフォロワーシップについて
		石川寛也氏（福井新聞社）	非管理職のフォロワーシップについて
生産管理論Ⅰ	木野龍太郎	青木花蓮氏（株式会社オーディオテクニカフクイ生産部 生産管理課（経済学科 2021 年 3 月卒業））	地方製造業における生産管理の取り組みについて－株式会社オーディオテクニカフクイの事例－
生産管理論Ⅱ	木野龍太郎	小林寛明氏（山金工業株式会社 総務部 人事労務課 課長）	地方製造業における製品開発の取り組みについて－山金工業

		吉村誠氏（同 開発部 製品開発課 課長代理）	株式会社の事例ー
		竹内紳祐氏（同 北陸収納営業部 北陸販売課 課長代理（経営学科 2016 年 3 月卒））	
		牧野晴彦氏（同 製造部 製造課 分解グループ（経営学科 2024 年 3 月卒））	
経営財務論	境宏恵	増永勇太郎氏 柿本晴香氏 （ともに福井県信用保証協会 総務部 総務課）	・ 中小企業の特徴と信用保証協会の役割 ・ 信用保証協会の仕事・業務とやりがい」
地域マネジメント論	杉山友城	江守雅人氏（原貿易株式会社代表取締役社長）	事業を通じて「出来ることから始めてみる」社内風土づくりから広がった当社流サステナブル社会への貢献
会計学Ⅱ	徳前元信	波田英之氏（北陸財務局・福井財務事務所所長氏	日本の財政を考える
		松戸寛氏（金沢国税局・福井税務署長）	給与と税・税務署の仕事
簿記論Ⅰ	山下知晃	岩永憲治氏（公認会計士・税理士）	公認会計士の仕事と魅力
		蟹江章氏（公認会計士・監査審査会常勤委員）	公認会計士制度について
合同ゼミ	杉山泰之、清水葉子、新宮晋、藤野秀則	黒崎健氏（京都大学、複合原子力科学研究所所長）	日本のエネルギーと原子力のこれから

自主ゼミ	経済学部教員有志	近畿地方整備局、足羽川ダム事務所	国家公務員としての働き方、および足羽ダムについて
------	----------	------------------	--------------------------

<表 2-2> 公開授業

公開科目	担当者	実施日時	備考
「移行経済論」 「演習 II」 【テーマ】 「キルギス共和国の最新情勢について」	A. ベロフ 【ゲスト講師】 バイドスノフ氏 アリエンテ株式会社 代表取締役社長	2025 年 7 月 8 日	ゲスト講師を招いた公開講義。本学 OB、大学院生、経済学部の教員も参加。
「ロシア経済特論」 「ロシア経済論」 「演習 II」 【テーマ】 「国際分業および GVS におけるロシアの位置づけ」	A. ベロフ 【ゲスト講師】 ゴルシコフ教授 (新潟県立大学)	2025 年 10 月 8 日～ 10 日	ゲスト講師を招いた公開講義。本学 OB、大学院生、経済学部の教員も参加。
外書講読 【テーマ】 Unconventional Monetary Policies in the Euro Area, Japan, and the United Kingdom	松岡孝恭	2025 年 11 月 11 日	経済学部棟 E105

2.1.3 授業改善についての課題と展望

ゲストを招聘した授業は、多様で、かつ様々な意図に基づいて行われていることが伺われる。学生の約半数が県内出身者である経済学部にとって、県内で活躍する社会人から県内の経済事情や企業動向を学べる意義は大きいだろう。

その一方で、ゲストを招聘する際、意図した講義内容を実現するには、事前の打ち合わせが重要になる。また、履修する学生は毎年変わるものの、同じ講師を毎回呼び、マンネリ化することは避けたい。今後は、これまで実施してきた招聘講義の経験を共有したり、相互に検証したりして、学生に刺激を与える質の高い講義を実現していく必要があるだろう。

また、公開授業も今後積極的に開催していく必要がある。できるだけ多くの学部スタッフが参加できるように、時間設定や講義の内容を考えていきたい。「学生の知的欲求を満たし、主体的な学習を促すためにどのような工夫が必要であるか…」。講義終了後の討論だけでなく、普段の教員の雑談や会話の中で自然に出てくるような学部の雰囲気作りが大切になるだろう。

2.2 生物資源学部（丸山千登勢）

2.2.1 授業評価

学部の授業評価結果は、前後期で大きな差はないが、前後期ともに値の低下が見られ、特に後期の意欲や関心の低下に比較的大きな低下が見られた点は注視すべきである。

近年 10 年間に於いて、生物資源学部の授業評価は、どの評価項目においても、他部局の授業評価より低い傾向にある。今年度も、生物資源学部の授業評価は、ほとんどの項目において全体平均より幾分低い結果となった。一般に理系科目のスコアは文系科目に比べて低くなる傾向はあるが、昨年度からの全体的な値の低下を起こした要因について意見収集を続ける。本年度はカリキュラム改訂を適用した初年であることが影響している可能性も考えられ、来年度以降も授業評価アンケートを継続して動向を観察する必要がある。

令和 7 年度 学生による授業評価全体集計結果（学部生）

		集計数	Q1 意欲	Q2 授業方法	Q3 内容理解	Q4 関心	Q5 総合評価
前期	全体	6194 (-861)	3.46 (0.03)	3.50 (-0.01)	3.35 (0.03)	3.38 (0.01)	3.57 (0.00)
	生物資源	347 (160)	3.27 (-0.09)	3.40 (-0.07)	3.14 (-0.05)	3.15 (-0.11)	3.48 (-0.02)
後期	全体	3498 (-36)	3.45 (0.00)	3.52 (-0.05)	3.35 (-0.04)	3.40 (-0.04)	3.59 (-0.05)
	生物資源	224 (-59)	3.21 (-0.18)	3.41 (-0.10)	3.17 (-0.10)	3.16 (-0.17)	3.50 (0.10)

() 内は、昨年度との差（今年度 - 昨年度）。

大学院の授業評価結果は、前期では、昨年度の結果として「意欲（0.35）」「授業方法（0.21）」「内容理解（0.15）」「関心（0.22）」の 4 項目で大きな評価値の向上が見られ、全体的に高い値を示していた。それに加えて今年度の結果は、「意欲」は同等であったものの、「授業方法」「内容理解」「関心」でさらに値の向上が見られた。上記した学部の結果で全体的な値の低下が見られたことと比べて、大学院では良い数値を示すことから、大学院進学者の意欲の高さが伺えた。しかしながら、後期の結果では、「意欲」「内容理解」で数値の低下が見られ、その傾向は昨年度にも見られた。後期に値が低下する傾向が継続的であれば、講義内容や実施方法によるものだけでなく、就職活動や修士論文のまとめが本格化する時期であることも影響すると考えられる。今後の評価値の変動について注視を継続し、後期にも意欲や内容理解が持続できるよう、遠隔授業の活用なども検討すべきと考える。

令和7年度 学生による授業評価全体集計結果（大学院生）

		集計数	Q1 意欲	Q2 授業 方法	Q3 内容 理解	Q4 関心	Q5 総合 評価
前期	全体	57 (22)	3.70 (0.14)	3.68 (0.04)	3.44 (0.16)	3.68 (0.24)	3.74 (0.18)
	生物 資源	21 (2)	3.57 (-0.01)	3.76 (0.08)	3.52 (0.20)	3.62 (0.20)	3.76 (0.13)
後期	全体	43 (17)	3.81 (0.39)	3.84 (0.34)	3.65 (0.23)	3.79 (0.21)	3.88 (0.23)
	生物 資源	12 (7)	3.50 (-0.30)	3.83 (0.23)	3.33 (-0.27)	3.67 (0.07)	3.92 (0.12)

() 内は、昨年度との差（今年度－昨年度）。

2.2.2 授業公開の方針と実績

(1) 方針

生物資源学部では、各教員が必要に応じて学部内の教員の講義を聴講し、講義内容を直接確認できるよう、全講義の「随時公開性」を採用している。また毎年、1) 授業評価において学生から高い評価を受けた授業、2) 効果的でユニークな教育手法を取りいれている授業、3) 生物資源学科と創造農学科の学生を対象としたハイブリッド形式の授業、4) 公開授業をまだ担当していない教員による授業を選定基準として1-2科目を選定し、所属教員による授業参観を実施している。本年度の実施はなかったが、今後も学科会議の中で、講義における工夫点やその効果について情報共有する機会を設け、随時授業公開も続けていく予定である。

また生物資源学部の両学科において、各学科の特色を活かした講義内容で高い専門性と技術力を持った人材育成を目指している。さらに、習得した技能を社会で発揮できる応用力を養うために、民間企業や研究機関などから外部講師を招聘し、実務者教育にも取り組んでいる。特に、福井県内で即戦力となりうる優秀な人材の輩出を目的に、県内の企業や研究機関との連携に努めており、2025年度に実施した外部講師による講義を（2）実績に示した。

(2) 実績

講義名：「地域生産実習」

担当教員：池田先生、松井先生、風間先生、石川先生、深尾先生、塩野先生、伊藤崇先生、仲下先生、日辛先生、植松先生

実施日：2025年5月～2026年1月の金曜隔週3、4限

県内企業・施設名（開催場所）：

県総合グリーンセンター（現地訪問）

武生製麺（現地訪問）

若狭湾エネルギー研究センター（現地訪問）

福井県食品加工研究所（現地訪問）

福井県農業試験場	(現地訪問)
福井県衛生環境研究センター	(現地訪問)
福井県畜産試験場	(現地訪問)
福井シード ベジプロセンター	(現地訪問)
東洋紡 敦賀バイオ研究所	(共通講義棟 L113 講義室)
セーレン株式会社	(共通講義棟 L113 講義室)
北陸環境科学研究所	(現地訪問)

講義名：「技術者と企業」

担当教員：塩野先生

実施日：2025 年 5 月～2026 年 7 月

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

前田工織株式会社	上野 貴己様 (生物資源学部棟 1F 会議室)
株式会社 田中化学研究所	木曾 健太様 (生物資源学部棟 1F 会議室)
ウラセ 株式会社	豊田 悠衣様 (生物資源学部棟 1F 会議室)
株式会社 ふじや食品	高原 美香様 (生物資源学部棟 1F 会議室)
株式会社 武生製麺	西原 俊樹様 (生物資源学部棟 1F 会議室)
株式会社 美十	坂元 雅哉様 (生物資源学部棟 1F 会議室)
勝山ファーマ 株式会社	中山 幹雄様 (生物資源学部棟 1F 会議室)
アイテック 株式会社	若林 恭輔様 (生物資源学部棟 1F 会議室)

講義名：「生体高分子化学」

担当教員：日弁先生

実施日：2025 年 12 月 4 日

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

東洋紡 敦賀バイオ研究所	角田様 (共通講義棟 L113 講義室)
--------------	----------------------

講義名：「応用微生物学 II」

担当教員：丸山先生

実施日：2025 年 7 月 24 日

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

野村醤油株式会社	野村 明志様 (共通講義棟 L113 講義室)
合名会社河原酢造	河原 泰彦様 (共通講義棟 L113 講義室)

講義名：「食品加工実習」

担当教員：木元先生、森川先生、三浦先生、加藤先生、高橋先生

実施日：2025 年 4 月～2025 年 7 月

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

食品衛生協会	大森 聖円様 (教育棟講義室)
食品加工研究所	藤田 富子様 (教育棟講義室)
フィールドワークス	吉村 みゆき様 (教育棟講義室)
カメハメハ大農場の農家カフェ	藤井 和代様 (教育棟講義室)
株式会社 武生製麺	西原 俊樹様、他 1 名 (現地訪問)
食育アドバイザー	松田 勇二様 (教育棟講義室)

農林水産省北陸農政局	斎藤 栄様（教育棟講義室）
うみの宿さへい	南 清美様（うみの宿さへい）
株式会社 ふじや食品	高原 美香様（現地訪問）
コム計画研究所福井オフィス	鈴木 奈緒子様（教育棟講義室）

講義名：「食農環境文化概論」

担当教員：村井先生、森川先生、篠山先生、林先生

実施日：2025年4月～2026年1月

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

自然保護センター	佐野 沙樹様（教育棟講義室）
福井県県産材活用課	仲保 要様（教育棟講義室）
福井県農林水産部・流通販売課	野村 文希様（教育棟講義室）
野菜ソムリエ	中島 早苗様（教育棟講義室）
こころファーム	福山 圭之様（教育棟講義室）
小浜市役所	中田 典子様（教育棟講義室）
農業試験場	中川 文雄様（教育棟講義室）
光合星	川村 鉄兵様（教育棟講義室）

講義名：「食農環境実習・演習Ⅰ」

担当教員：木元先生、村井先生、森川先生、加藤先生、黒川先生、篠山先生、高橋先生、林先生、牧野先生

実施日：2025年4月～2025年12月

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

総合グリーンセンター	仲保 要様（あわらC圃場）
のじファーム	野路 直美様（教育棟講義室）
北潟湖自然保護センター	佐野 沙樹様（現地訪問）
あわら市生活環境課	長谷川 恵様（現地訪問）
きららの丘・販売部	深町 治男様（現地訪問）
きららの丘・選果場	近藤様（現地訪問）
畜産試験場	田辺 勉様（現地訪問）
インスフィアファーム	松井 伸吾様（現地訪問）
株式会社 ふじや食品	高原 美香様（現地訪問）
県庁農林水産部・中山間農業・畜産課	小林みどり様、仲保 要様（現地訪問）
国交省近畿地方整備局 足羽川ダム工事事務所	三橋 佑介様（現地訪問）
株式会社無限大	木子 博文様（現地訪問）
トレタス	大西様、布目様（現地訪問）
福井精米株式会社	樋田 光生様、安野 恵理様（現地訪問）
たんぼの天使	井上 高宏様（現地訪問）
ファーム広瀬	庭本 久則様（現地訪問）
総合グリーンセンター	きのこアドバイザー 笠原 英夫様（現地訪問）
丹生寺坂農園株式会社	寺坂 大地様（教育棟調理室）
ひのの実	藤井 博貴様（現地訪問）
福井県文書館	宇佐美 雅樹様（教育棟調理室）
小浜市役所	中田 典子様（教育棟調理室）

あわら市観光ガイド協会	酒井 敏雄様（現地訪問）
あわら市健康長寿課	角谷様（教育棟調理室）
そば打ちの会	宮寄恵介様、佐藤岳之様（教育棟調理室）

講義名：「食農環境実習・演習Ⅱ」

担当教員：木元先生、村井先生、森川先生、三浦先生、加藤先生、黒川先生、篠山先生、松本先生

実施日：2025 年 4 月～2025 年 12 月

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

森のめぐみカフェ	田嶋 吉一様（現地訪問）
うみの宿さへい	南 清美様（現地訪問）
木下ファーム	木下 良治様（現地訪問）
フィールドワークス	吉村 みゆき様（現地訪問）
総合グリーンセンター	仲保 要様（現地訪問）
農業試験場	川崎 佳治様（現地訪問）
フィールドワークス	吉村 智和様（現地訪問）
三里浜砂丘地農業支援センター	山田 誠一様（現地訪問）
福井市園芸センター	小林 照代様（現地訪問）
年縞博物館	（現地訪問）
自然保護センター池ヶ原湿原	佐野 沙樹様（現地訪問）
かみなか農楽舎	八代 恵里様（現地訪問）
（株）太地リーフ	久保 泰宏様（現地訪問）
農業試験場	中川 文雄様（あわら C 果樹園）
土地改良事業団体連合会	千秋様（現地訪問）

講義名：「農業戦略論」

担当教員：三浦先生

実施日：2025 年 10 月～2025 年 11 月

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

コム計画研究所福井オフィス 鈴木 奈緒子様（教育棟講義室）

講義名：「農業インターンシップ」

担当教員：森川先生

実施日：2025 年 8 月～2025 年 9 月

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

（株）農好社	中垣内 祐一様（現地訪問）
（株）加藤農産	加藤 秀信様（現地訪問）
（株）田川農産	田川 幹雄様（現地訪問）
（株）フィールドワークス	吉村 智和様（現地訪問）
（株）三つ星	富田 美和様（現地訪問）
ICHIGOOJI	池田 天瑠様（現地訪問）
（株）光合星	川村 鉄兵様（現地訪問）
（株）西農園	西 善昭様（現地訪問）
NPO ピアファーム	林 博文様（現地訪問）

(有)瀬戸生花	瀬戸 誠市様 (現地訪問)
田嶋牧場	田嶋 敏様 (現地訪問)
カメハメハ大農場の農家カフェ	藤井 和代様 (現地訪問)
波まち café	坂井 優様 (現地訪問)
ひのの実	藤井 博貴様 (現地訪問)
三里浜オリーブ生産組合	村嶋 哲郎様 (現地訪問)
玉村屋	中谷 翔様 (現地訪問)
ちくちくぼんぼん	大門 正悟様 (現地訪問)
農業試験場	川崎 佳治様 (現地訪問)
園芸研究センター	川崎 佳治様 (現地訪問)
畜産試験場	福島 麻衣様 (現地訪問)
総合グリーンセンター	藤田 義憲様 (現地訪問)
食品加工研究所	藤田 富子様 (現地訪問)
自然保護センター	佐野 沙樹様 (現地訪問)
福井県農業共済組合	澤井 昭典様 (現地訪問)

講義名：「花卉園芸学」

担当教員：篠山先生

実施日：2025 年 7 月 11 日

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

福井県奥越農林総合事務所 森永 一様（教育棟講義室）

講義名：「農産物利用学」

担当教員：黒川先生

実施日：2025 年 7 月 10 日

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

坂井市農業振興課 近藤 恵様（永平寺キャンパス）

講義名：「先端農業技術管理論」

担当教員：森川先生、三浦先生、加藤先生、黒川先生、林先生

実施日：2025 年 4 月～2026 年 1 月

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

タニグチ商会 谷口 康博様（教育棟講義室）

福井県庁農林水産部 桑原 翼様（教育棟講義室）

講義名：「総合的生物多様性管理論」

担当教員：村井先生、加藤先生、篠山先生、牧野先生

実施日：2025 年 5 月～2025 年 12 月

県内企業・施設名及び講師名（開催場所）：

自然保護センター 佐野 沙樹様（教育棟講義室）

（公社）農林水産支援センター 富田 桂様（教育棟講義室）

（株）BO-GA 関岡 裕明様（教育棟講義室）

国交省近畿地方整備局足羽川ダム工事事務所 三橋佑 介様（教育棟講義室）

2.2.3 授業改善活動についての課題と展望

生物資源学部では、各教員が必要に応じて学部内の他の教員の講義を聴講し、講義内容を確認できるよう、全講義の「随時公開性」を採用している。また、毎年2科目程度を授業公開の対象として選定し、所属教員による授業参観を実施している。公開授業後には講義の工夫や課題、解決策について意見交換を行っている。生物資源学部の1/3～1/4の教員が出席しており、今後もこうした活動を継続し、学部全体の講義の質の向上に努めていきたい。

今年度の生物資源学部における授業評価アンケートの実施率は、前期では100%、後期では77.3%であった。例年、生物資源学部では前期・後期ともに90%程度の高い実施率を維持していたが、昨年度の実施率が前期77.8%、後期80%と低下傾向にあった。実施率が低くなった理由は明確ではないが、授業評価アンケート自体は実施されていたものの、学生からの回答が得られず、結果的に実施率が下がった可能性が考えられる。実際に今年度も生物資源学部での学生からの回答状況は、全体平均と比較して低かった。今後も授業評価アンケートを講義時間中に実施する、繰り返し学生に回答を促すなど、回答状況の改善に努めたい。

また本年度のアンケート結果において、前期、後期ともに学生の意欲や関心の低下が見られたことは注視すべきであると考ええる。来年度、学生が関心を持って取り組める講義を目指し、授業評価アンケートに寄せられた学生からのコメントを共有し、講義内容の充実と各教員の講義スキル向上に役立てることを検討している。

2.3 海洋生物資源学部（高尾祥丈）

2.3.1 授業評価アンケート

海洋生物資源学部における 2025 年度の授業評価アンケートの実施科目数は前期が 29、後期が 19 科目であった。受講者が少人数（概ね 5 人以下）の科目やオムニバス形式の科目、実験・実習・演習科目を除き、ほぼ全ての科目で授業評価アンケートが実施された。また、多くの教員は、学生からの自由記述に対して具体的な改善方法を提示するなど丁寧なコメントを公表していた。

アンケート結果の経年変動を見ると（ファカルティ・ディベロップメント報告書の 1.2.1 授業評価「重要項目の経年特性」の参照）、前期では昨年と比べて評価が上昇し、多くの項目で 2024 年度を超える結果となった。後期における本学部の講義に対する評価は昨年と比して若干低下したが、概ね安定傾向にあった。両学期を通して、ほとんどの項目で 3.3 を超える評価を得た。一方全学との比較では、前期・後期ともにやや下回っている項目が多く（図 1）、本学部の講義にもまだ改善の余地が残されていることが示唆される。

評価値の標準偏差は、例えば総合評価の項目で前期 0.62、後期 0.6 と、全学平均とほぼ同等であった。しかし、講義間で回答数に多少があり、少ない回答者の講義についてはバイアスがかかっている（熱心な学生が主に回答するため評価が一定になる）こともあるため、回答数の向上を目指して、講義時間内に回答時間を設けることや、余裕をもってアンケート期間を設けるなどの対応を進めることが重要となる。また、アンケート結果を講義科目間で（あるいは学部間や年度間で）比較する際には、教員の変更や科目ごとの難易度の違いもあるため、細心の注意が必要であることは言うまでもない。特に理系の基礎科目においては、実際に自らが研究の現場で使用することでその重要性・有用性を実感しない限り、学習する意義をなかなか見出しづらい性質の科目も数多く存在する。その意味で、アンケート結果だけが講義の評価基準ではないことには十分配慮しつつ、引き続きより効果的かつ魅力的な講義を展開できるよう学部全教員で協力して取り組んでいきたい。

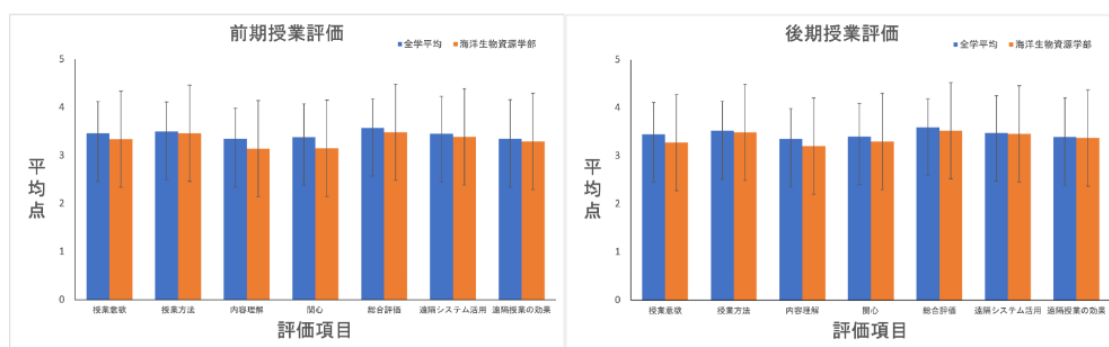


図 1: 2025 年度前期および後期の海洋生物資源学部における授業評価アンケートの結果。各項目に付されたバーは標準偏差を表す。

2.3.2 授業公開

(1) 方針

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参観者と意見交換することを通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得る機会を提供することを目的とする。授業公開は大学教育における画一的な模範授業を目指すためのものではなく、教育の自由が保障される中で、個々の授業内容に合わせたより特色のある効果的な授業を継続的に育むためのものである。そのため、授業内容について非建設的な批

判を行うのではなく、講義に対する互いのスタンスを尊重しながら、特に授業方法について教員同士が学び合うことを趣旨としている。

(2) 実績

2025 年度には後期に一回の授業公開を実施した。参加教員数が本学部専任教員 31 名中 5 名と例年よりは少なかった。キャンパスが違う養殖科学科の教員の参加が少なく、次年度以降はより積極的に参加を呼びかけたり、前後期 2 回両学科の講義を対象にしたりすることにより、授業改善の有効な場となるよう努める。

本年度の授業公開は、山本 昌幸 教授が海洋生物資源学科の2年次に開講している「海洋生産環境学」を対象として12月に開催された。本科目は海の生物生産過程を理解するための基礎知識として様々な海洋生態系の特徴を概説する科目で、学生にとって人気の科目でもある。

山本教授の「海洋生産環境学」がどのようにして講義内容を学生に伝え、また、学生の知的欲求を満たし、主体的な学習を促すためにどのような工夫がなされているのかを知り、自らの講義へとフィードバックする機会と位置付けて授業公開を実施した。

・実施詳細

日時:令和 7 年 12 月 9 日(火)

9:00~10:30:授業公開 大講 2

10:40~11:10:検討会 1 階会議室

先生:山本 昌幸 教授

講義: 海洋生産環境学

(海洋生物資源学科 年次開講、専門応用科目 選択))

参加者: 5 名 (山田、吉川、山本、高尾、水田)

講義内容に対する意見の概要は以下の通りであった。

工夫されている点・参考になる点

- ・赤潮対策の解説などについて、ただ実施していることを紹介するだけではなく、現場の声から対策が生まれた話し等、経緯がわかる。

- ・前回の復習や質問への回答をしていた点

- ・スライドに写真を多用するなど、養殖の状況などが視覚的に分かりやすいように工夫されていた。

改善したら良いと思う点

- ・教員と学生の間の双方向の対話があるとなお良いと感じた。

2.3.3 授業改善についての課題と展望

海洋生物資源学部における今後のFD活動方針

2025 年度は先端増養殖科学科の学生が全学年揃い、海洋生物資源学科・先端増養殖科学科の二学科体制による専門講義や実験・実習が本格化して2年目となった。本学部の専門講義には小浜キャンパスとかつみキャンパスで行われる講義があり、キャンパス間の移動やテレビ講義をいかに円滑に実施するかが今後の課題である。このような課題の解決及び、各教員の講義をより魅力的かつ効果的なものとするために、来年度以降は、両学科の授業を対象として、年二回程度（前期・後期に一回ずつ）、若手とベテランの教員の授業公開を実施する。また新任教員の方にも積極的に参加を呼びかけ、在任教員との間で自由に意見交換できる機会を提供することを目指す。こうした教員間の相互作用を通じて、各教員が自らの専

門性や背景を活かした特色ある講義について考える契機になればと期待している。さらに、授業公開のうち少なくとも一回は前年度までの授業評価アンケートで高い評価を受けた授業を対象とすることで、授業評価アンケートのフィードバックを通じた教育の質の向上を目指す。

2.3.4 県内就職率向上への取り組み(外部講師招聘)実績

県内就職率向上への取り組みとして、海洋生物資源学部の授業内、特に海洋生物資源学科の「地域活性化演習」、先端増養殖科学科の「地域活性学」、において県内企業、事業者を講師として招聘し学生と県内企業・事業者との交流・協働の機会を積極的に設けている。

海洋生物資源学科

- ・地域活性化演習
NPO 法人 森林楽校・森んこ 萩原茂男 氏
デザイン事務所 UMIHICO 堀越一孝 氏
- ・フィールド演習 I
小浜海産物株式会社 森陽介 氏
- ・専門特別講義 2
鳥浜漁業協同組合 田辺喜代春 氏
海山漁業協同組合 田辺善治 氏
- ・基礎演習特別講義
福井県衛生環境センター 村田健 氏
- ・基礎演習特別講義
小浜市長 杉本和範 氏

先端増養殖科学科

- ・地域活性学
一般社団法人 若狭路活性化研究所 田辺一彦 氏
一般社団法人 Anomiana 代表 西野ひかる 氏
まちづくり小浜「おばま観光局」 御子柴北斗 氏
株式会社 BO-GA 関岡裕明 氏
若狭東高校校教諭 松井明 氏
- ・養殖学実習 I
ふくい振興センター 仲野大地 氏
漁業者 角野正典 氏, 角野高志 氏
- ・水産増養殖学概論
フィッシュパス 西村成弘 氏

2.4 看護福祉学部（岡田隆志）

今年度も例年どおり、授業評価アンケートは前期・後期ともに Google フォームを用いたオンライン調査として実施した。学部全体の結果を報告する。本データを基に、授業評価（2.4.1）と授業改善の取り組み、今後の課題および展望を示す。また、FD 研修（2.4.2）と授業公開（2.4.3）、授業の要望フォーム結果（2.4.4）についてもあわせて報告する。

2.4.1 授業評価

2025 年度は、対面授業を基本としつつ、ハイブリッド型やハイフレックス型の授業を柔軟に取り入れて実施した。BYOD の推進により授業資料のペーパーレス化が進み、教員・学生ともに PC やタブレット、スマートフォンを活用する環境が整った。その結果、講義・演習・実習のすべてで多様な授業形態が定着した。

令和 7 年度における看護福祉学部と大学全体の授業評価の比較結果は次のとおりである。

【R7 年度前期授業評価】

前期の回答数は、学部が 774 件（対象 2,433 件）、大学院（看護福祉学研究科、以下同じ）が 12 件（対象 16 件）であった。例年、大学院は少人数開講のため FD 授業評価アンケートの対象外としてきたが、今年度は少数ながら実施した。学部の参加教員は 27 人（96.4%）、参加科目は 44 科目（81.5%）であった。大学院は参加教員 2 人（100%）、参加科目 2 科目（100%）であった。

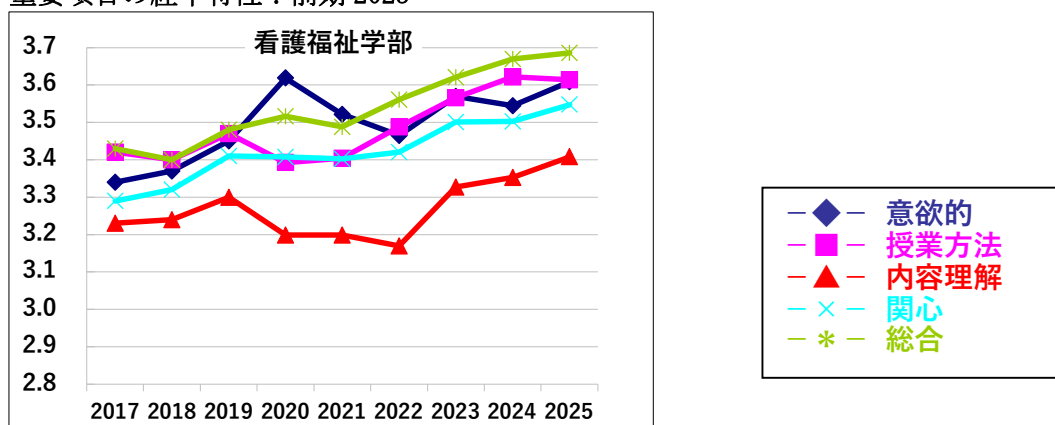
令和 7 年度 学部生による授業評価全体集計結果（前期）

	集計	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q9	Q10
		意欲的受講	授業方法	内容理解	関心	総合評価	遠隔システム活用	遠隔授業の効果
全体	6,194	3.46	3.50	3.35	3.38	3.57	3.45	3.35
看福	774	3.61	3.61	3.41	3.55	3.69	3.60	3.52

※1. 本学部を「看福」とする。 ※2. 全体表より全体値及び本学部値を抜粋。

次に、前期科目における重要項目の経年変化を示す。

重要項目の経年特性：前期 2025



【R7 年度後期授業評価】

後期の回答数は、学部が 340 件（対象 1,607 件）、大学院が 8 件（対象 8 件）であった。学部の参加教員は 17 人（85.0%）、参加科目は 27 科目（81.8%）であった。大学院は参加教員 1 人（100%）、参加科目 1 科目（100%）であった。

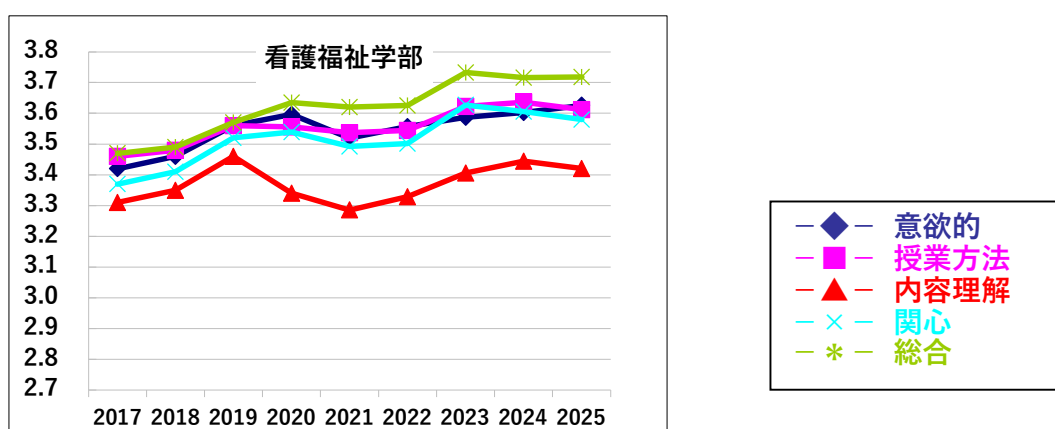
令和 7 年度 学部生による授業評価全体集計結果（後期）

	集計	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q9	Q10
		意欲的受講	授業方法	内容理解	関心	総合評価	遠隔システム活用	遠隔授業の効果
全体	3,498	3.45	3.52	3.35	3.40	3.59	3.47	3.39
看福	340	3.63	3.61	3.42	3.58	3.72	3.63	3.60

※1. 本学部を「看福」とする。 ※2. 全体表より全体値及び本学部値を抜粋。

次に、後期科目の重要項目の経年特性を示す。

重要項目の経年特性：後期 2025



科目ごとの差はあるものの、すべての項目で本学部は全体平均を上回り、例年とほぼ同様の結果であった。Q1～Q5 に関しては、国家試験の取得や専門職への就職を目指す学生が大半を占めており、教員が常に高い意識と緊張感をもって授業に取り組んでいると考えられる。

また、Q9～Q10 は情報センターに次ぐ高い値を示しており、教員にとって遠隔システムは負担感や苦手意識の少ない、日常的な授業ツールとして定着していると考えられる。

なお、大学院の回答は少数のため本稿では割愛するが、全体平均と同等、またはそれ以上の評価であった。

コロナ禍を経て、2023 年度以降はすべての項目で向上の傾向にある。授業では、必要な内容を伝えるだけでなく、学生一人ひとりの関心や状況に応じた対応や工夫がなされており、こうした取り組みが結果につながっていると考えられる。今後も FD の機会を活用し、授業方法がさらに洗練されることが期待される。

なお、参考までに 2025 年度看護学科卒業生の国家試験合格率は、看護師 98.3%、保健師 93.3%であった。社会福祉士および精神保健福祉士はいずれも 100%であった。

2.4.2 FD 研修

看護福祉学部では、大学院授業のうち外部講師の許可が得られた科目を特別講義として公開している。今年度も年間を通して複数の講義を開講し、すべてハイフレックス形式で実施した。これにより受講しやすい環境が整い、自己研鑽の機会として多くの大学院生および学部教員が参加した。今年度の公開講義の実績は以下のとおりである。

【大学院特別講義開催一覧】

1. 演題：Emancipatory Disability Research in Brazil
講師：ブロック・パメラ先生（カナダ・ウェスタンオンタリオ大学教授）
日時：5月1日（木）6限
2. 演題：成年後見制度と医療保護入院制度との関連 ～精神保健福祉士の立場での葛藤～
講師：浅沼尚子先生（ソーシャルワーカー事務所長楽庵代表）
日時：6月5日（木）6限
3. 演題：老・脳・寿：老いをみつめる脳科学
講師：森望先生（福岡国際医療福祉大学医療学部特任教授）
日時：6月6日（金）6限
4. 演題：医療・ケアを求める人の倫理的問題をどのように話し合うか
講師：高野誠一郎先生（福井赤十字病院副院長・神経内科部長）
日時：6月26日（木）6限
5. 演題：生殖・周産期の遺伝倫理について
講師：渡邊淳先生（金沢大学附属病院遺伝診療部特任教授）
日時：7月7日（月）6限

6. 演題：ケアとまちづくり、ウェルビーイング社会へ ～看護職のはたす役割～

講師：加藤瑞穂先生（株式会社オリナス代表取締役）

日時：7月22日（火）6・7限

7. 演題：長生きのメカニズム

講師：市川寛先生（同志社大学大学院生命科学研究科教授）

日時：10月3日（金）6限

8. 演題：地域社会におけるこどものアドボカシー

講師：櫻幸恵先生（一般社団法人ふたば代表理事）

日時：10月24日（金）6限

2.4.3 授業公開

授業公開については例年、前期と後期に複数の科目を選定し、参加者を募るようにしていた。しかし、今年度は、FD 担当者の準備不足によって、前期分を執り行うことができなかった。後期は、「地域・在宅看護学（担当：普照早苗先生）」、「地域包括実習（担当：成田光江先生）」、「地域福祉論Ⅱ（担当：永井裕子先生）」、「精神保健福祉制度論（岡田隆志）」が選定され、これらの科目に関して授業参加者を学部内教員の中から募集した。

参加希望者は、「地域・在宅看護学」1名、「地域包括実習」2名のみとなった。

以下に、開催された科目に関して、参加教員による意見・感想の概要を掲載する。

1) 後期：「地域包括実習」参加教員のアンケート内容

（1）授業に参加しての感想

- ・地域包括実習（2週間）における学生の発表に参加し、授業・演習から臨地実習へと学びを統合する教育プログラムであると感じた。特に、退院支援において生活者の視点や価値観、人権・尊厳を重視するケアとチーム支援の重要性が示されていた。

- ・地域包括ケアの理解について、実習を通して自分の言葉で説明できることを目標としており、学生間カンファレンスが思考整理に有効であると学んだ。

- ・看護師養成カリキュラム改正の方向性に沿い、生活を捉える看護の視点に加え、地域資源など福祉分野の知識も学べる内容となっていた。退院後の在宅生活を見据えた教育として、看護師の役割理解の深化につながっていた。

- ・3年次生の小グループによる実習最終発表に参加し、各自が退院支援計画と学びをまとめた内容をもとに発表していた。実習の進行に伴い、個別支援にとどまらず、地域包括ケアにおける看護職の役割や多職種協働への理解が深まっていた。学生の成長段階が進んでいる様子が見られた。

- ・他領域の実習に参加したことで、学生の多様な学びや成長を把握でき、自身にとっても有意義な機会となった。今後もこのような機会の必要性を感じた。

(2) 自分の授業等にどう活用していけそうか

- ・保健師実習において、知識や実践力の向上に加え、根拠に基づいて自分の考えを説明する力を養うため、ショートカンファレンスの導入を検討したい。
- ・地域包括実習の発表に参加した経験を通して、学生指導に広い視野を取り入れる必要性を感じた。
- ・他領域の教員による指導から、多角的・客観的に学生を捉える視点の重要性を学んだ。
- ・他領域の授業に参加し学生の様子を直接見る経験は、今後の教育内容の検討に有益であり、継続的に活かしていきたい。

2) 後期：「地域・在宅看護学」参加教員のアンケート内容

(1) 授業に参加しての感想

- ・教科書に加え、厚生労働省や福井県内の退院支援の状況・体制に関する情報にもアクセスできる構成で、要点が整理されており理解しやすかった。
- ・保健師実習での地域包括支援センター実習や退院支援に関連する内容と重なり、学生がこれまでに学んできた内容を確認する機会となった。
- ・公衆衛生看護学は看護学科の多くの科目に関わるため、このような機会は学生にとって効果的かつ効率的な学びにつながると感じた

(2) 自分の授業等にどう活用していけそうか

- ・授業後にミニレポートを課すことで、学生の理解と意識を高める工夫がなされていた。
- ・今後は自身の授業でも、ミニレポートやミニテストを積極的に取り入れていきたい。

3) アンケート結果：今後参加したい授業について

- ・今回は看護学領域の実習まとめに参加したが、今後は機会があれば社会福祉学科の実習まとめにも参加したい。

4) 今回の授業公開に関する反省点・今後の改善点

近年、様々な配慮を要する学生が増加しており、やむを得ず中退に至る学生も続いている。このような状況の中で、世界的にはユニバーサルデザインラーニング（UDL）が注目されている。これは、障害の有無にかかわらず、すべての学生の多様なニーズに対応するために工夫された教育方法であり、特定の学生への特別な配慮にとどまらないものである。質の高い教育を実現するためには、授業設計・指導法・評価基準を個別に捉えるのではなく包括的に検討することが重要であり、そのことが学習効果やウェルビーイングの向上につながる。こうした観点から、学生が主体的に授業へ参加しやすい環境を整えるため、教員は継続的に教育法について学んでいく必要がある。一方、FDに関心を寄せる教員には偏りがみられているこれに対して、義務まではせずとも、すべての教員に対して、数年に一度は授業公開を行う、受ける機会を保障していく仕組みづくりを考えていく必要があろうと思われる。

それには、年間を通して教員が授業公開にアクセスしやすい環境にしていく必要がある

るが、今年度においては通年を通した授業公開の機会を作ることができなかった。担当者としての実施に関する意識が低く、準備が整えることができなかった。次年度は計画性をもってとりくみたい。加えて、看護福祉学部は他学部と異なり、両学科ともに実習教育を有している点が特徴である。それぞれの領域において実習教育の方法には多様な工夫がなされていると考えられるため、これらの知見を相互に共有し活用していくことが重要である。そのため、次年度以降は授業公開の対象に実習指導や演習を積極的に取り入れることについて検討していきたい。

2.4.4 授業の要望フォームについての結果

2025 年 7 月に本格導入した授業要望フォームについて、看護福祉学部の授業に関する意見はなかった。フォームの利用方法はメールなどで周知しているが、すべての学生に十分に理解されているとは限らないため、次年度以降も周知の徹底が必要である。

最後に、看護福祉学部の FD 申し合わせの内容を、昨年に続き再掲する。

【FD 部会「授業公開」についての申し合わせ】(2023 年 11 月看護福祉学部教授会)

1. 「授業公開」科目の選定について

- ・毎学期、各部局で 2～3 科目を選定する。選定方法は、①希望者、②他者からの推薦で行い、教授会で看護学科・社会福祉学科それぞれの科目が最終選定される。
- ・FD 部会員から、FD 部会長に選定された科目を連絡する。

2. 「授業公開」対象科目担当教員の役割

- ・FD 部会員に、授業の日時と場所（教室）をお知らせ頂く。
- ・その他、特に事前準備等は不要。いつも通りの授業を実施する。
- ・参加教員に対して、要望や注意点などがあれば、FD 部会員に連絡する。

3. 「授業公開」対象科目に参加する教員の役割

- ・FD 部会員に、参加したい「授業公開」対象科目を事前に知らせ、当日参加する。
- ・授業進行に支障がないよう、参加教員からの要望や注意点を守り、聴講する。
- ・参加後、FD 部会員からメール配信された参加者用シートに以下の内容を簡潔に記載する。

「1. 授業に参加しての感想」

「2. 自分の授業等はどう活用していけそうか」

「3. その他」

これらの内容は、年度末の FD 報告書に部局別に掲載される（但し記載者名は公開されない）。

4. 備考

- ・FD としての「授業公開」の目的・目標にそって実施する（資料 1 参照）。
- ・上記以外の行為があった場合は、FD 部会員に知らせる。

以上

2.5 恐竜学部（高田裕行）

恐竜学部は令和7年度に設立であり、講義は1年生対象のみであった。本学部における令和7年度の授業評価アンケートの実施科目数は前期が5（専門科目2；共通教育科目3）、後期が4（専門科目3；共通教育科目1）であった。

2.5.1 授業評価

恐竜学部は令和7年度に設立されたため、本報告では授業評価の経年変動等に関する議論はせず、本学部と大学全体の授業評価を比較のみを試みた。

		集計数	Q1 意欲	Q2 授業方法	Q3 内容理解	Q4 関心	Q5 総合評価	Q9 遠隔システム活用	Q10 遠隔授業の効果
前期	全体	6194	3.46	3.50	3.35	3.38	3.57	3.45	3.35
			0.66	0.61	0.63	0.69	0.60	0.78	0.81
	恐竜	39	3.41	3.49	3.33	3.51	3.59	3.50	3.50
			0.67	0.55	0.69	0.55	0.59	0.50	0.50
後期	全体	3498	3.45	3.52	3.35	3.40	3.59	3.47	3.39
			0.65	0.60	0.60	0.69	0.58	0.74	0.76
	恐竜	51	3.51	3.45	3.20	3.63	3.63	3.33	3.13
			0.64	0.57	0.44	0.56	0.52	1.01	1.15

恐竜学部の授業評価は、大学全体のものとおおむね類似したスコアであった。一方、「3. 内容理解」については、大学全体と比較して若干低く、授業内容が難しいと学生たちが感じていたようである。地質学・古生物学においては、特有の専門用語の知識が肝要であり、1年生にとってはまだ馴染みがなかった可能性が考えられる。この点は今後、教員が意識して、改善に努めるべき事項と言える。他方で、「Q4 関心」は大学全体と比較しても高く、本学部一期生の開講科目に対する意識の高さがうかがえる。

2.5.2 授業公開とゲスト招請授業

令和7年度は1年生のみであったため、授業公開を実施することはなかった。また、同様の理由で専門科目も少ないため、ゲスト招請授業も実施されていない。

他方で令和8年度は新規の試みとして、1年生対象の共通教育科目「地球史入門」（担当 西教授）で、福井県年縞博物館よりスタッフ2名を外部講師として招聘し、3回のゲス

ト招請授業を実施予定である。また今後、学芸員取得のために順次開講される科目では、本学部と隣接する福井県恐竜博物館のスタッフにも、講義を分担いただく予定である。

以上のように今後、本学部でも授業公開とゲスト招請授業を順次導入し、学生へ様々な学びの機会を充実させていく予定である。

2.5.3 授業改善についての課題と展望

恐竜学部では第一期生の講義に関する関心は押し並べて高く、講義以外の時間にも、学生が質問などのために、教員研究室を訪問するなど、積極的な行動が目立った。これは個々の講義内容の改善要望だけでなく、講義中のマスコミによる学生への過剰な取材に対して、ガイドライン策定につながるなど、有効に働いたと考えている。

恐竜学部では、令和7年度は永平寺キャンパスで、学生と教員がともに過ごしたため、両者が自然と交流でき、講義の悩みや改善要望を、拾える機会が数多くあった。しかし、令和8年度にほとんどの教員が、勝山キャンパスの恐竜学部棟に研究室を持つため、本拠地が永平寺キャンパスではなくなる。勝山キャンパスでの活動が主となる2年生にとっては、これまで以上に教員との交流をしやすくなる一方で、永平寺キャンパスで学ぶ1年生にとっては、教員との距離が開きがちになると予想される。授業改善の点でも、これをどのように埋めていくかは、今後の課題と言える。

昨年度は、担任・副担任となった教員が、全学生への個人面談を実施した。こうした取り組みは、講義中のマスコミによる取材の適切なあり方などについて、学生の意見を拾う重要な機会ともなった。このような取り組みは、今後も永平寺キャンパスで学ぶ1年生にとって、講義に関する悩みや改善要望を拾う重要な機会になりえる。

令和8年度も、昨年度と同様に担任・副担任となる教員が、1年生と2年生ともに配置されており、他の教員と情報共有することで、授業改善に関しても、今後も継続して関する学生に対するケアに、心がけていく予定である。

2.6 情報センター（田中武之）

情報センターは令和5年4月に開設された。令和4年度から「全学数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」を開始し、令和5年度から情報応用科目や数学科目を中心に構成される同プログラム（応用基礎レベル）を開始している。令和5年度にリテラシーレベルは文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」に認定され、令和6年度には同じく応用基礎レベルが認定された。さらに、令和7年度には本学のカリキュラムが改定され、従来あった「情報基礎演習」は「ICTリテラシー」に、「情報処理基礎演習」は「データサイエンス基礎」に改編されたことなどをはじめ、全ての情報科目の内容が一新されている。

このプログラムでは毎年の自己点検・評価が求められているため、学生による授業評価を令和4年度から実施している。この評価に用いる項目と、FD部会で実施している授業評価アンケート（以下、FDアンケート）とは設問が若干異なり、FDアンケートの回答結果の取扱いにも制限がある。そのため、プログラムにおける自己点検・評価では、独自に情報センターで作成した授業評価アンケート（以下、数理・DS・AIプログラム評価アンケート）を実施している。

情報センター提供科目のうち、「全学数理・データサイエンス・AI教育プログラム」構成科目以外ではFDアンケートを実施している。以下では、はじめにFDアンケートの結果について報告する。次に情報センターで実施した数理・DS・AIプログラム評価アンケートの結果を報告し、授業評価を行う（2.6.1）。また、FD活動（2.6.2）ならびに授業改善の取り組み（2.6.3）について報告する。

2.6.1 アンケート結果と授業評価

はじめに、FDアンケートの結果について報告する。前期および後期のFDアンケート結果は、それぞれ、下表のようになった。

前期 集計数 391	Q1 意欲的受講	Q2 授業方法	Q3 内容理解	Q4 関心	Q5 総合評価	Q9 遠隔システム 活用	Q10 遠隔授業の 効果
平均値	3.40	3.56	3.29	3.23	3.53	3.63	3.49
母標準偏差	0.67	0.56	0.62	0.71	0.61	0.63	0.72

後期 集計数 43	Q1 意欲的受講	Q2 授業方法	Q3 内容理解	Q4 関心	Q5 総合評価	Q9 遠隔システム 活用	Q10 遠隔授業の 効果
平均値	3.40	3.49	3.21	3.21	3.53	3.71	3.59
母標準偏差	0.53	0.59	0.82	0.63	0.58	0.45	0.49

「意欲的受講 (Q1)」では、前期・後期とも 3.40 で、学生は授業に前向きに取り組んで入ることがわかる。「授業方法 (Q2)」に関しても、特に問題なく受け入れられているようである。一方、「内容理解 (Q3)」「関心 (Q4)」についてはやや低く、授業の工夫によって学生の興味・関心を引き出す必要があろう。「総合評価 (Q5)」は 3.53 で、一部の学生から高評価を得ているが、さらなる改善によって向上が必要とされる。情報科目では、ほぼすべての授業で遠隔システムを利用しているおり、「遠隔システム活用 (Q9)」「遠隔授業の効果 (Q10)」が高い評価を得ていることがわかった。

次に、情報センターで実施した数理・DS・AI プログラム評価アンケートの結果について報告する。このアンケートは以下の設問から構成される。

質問項目 (*は必須回答)

- Q1. この授業を受講することにより、シラバスに記載されている授業目標は達成できましたか？*
1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う
- Q2. この講義（課題、レポート、予習復習を含む）に意欲的に取り組むことができましたか？*
1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う
- Q3. この授業についての方法（先生の講義の方法、話し方、資料の提示方法、学習支援システム・遠隔システムの活用など）は適切でしたか？*
1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う
- Q4. この授業の内容は理解できましたか？*
1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う
- Q5. この授業に関連する分野への興味や関心は高まりましたか？*
1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う
- Q6. この授業を後輩学生等他の学生に勧めたいと思いますか？*
1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う
- Q7. 総合的に判断して、この授業を受講してよかったと思いますか？*
1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う
- Q8. 遠隔で行われた授業について、遠隔システムの活用（資料の提示方法、フィードバック

クのあり方等)はどうでしたか？

1. うまく活用されていない 2. あまりうまく活用されていない 3. まずまずうまく活用されている、4. うまく活用されている

Q9. 遠隔で行われた授業について、学習の効果はありましたか？

1. 効果がなかった 2. あまり効果がなかった 3. ある程度効果があった 4. 効果があった

Q10. この授業について、その方法、教材、授業内容など、良かった点や悪かった点、要望などを自由にご記入ください。(自由記述)

質問項目は、「授業目標の達成度 (Q1)」、「意欲的受講 (Q2)」、「授業方法 (Q3)」、「内容理解 (Q4)」、「興味・関心 (Q5)」、「後輩学生への推奨度 (Q6)」、「総合評価 (Q7)」、「遠隔システム活用 (Q8)」、「遠隔授業の効果 (Q9)」、「自由記述 (Q10)」となっており、FD アンケートの質問項目を包含するものである。

数理・DS・AI プログラム評価アンケートの実施時期・方法は、FD アンケートと同様に、学期末に Google フォームを用いて匿名で回答する。Q1～Q9 については統計的に処理した結果を、Q10 の自由記述については多くの学生に共通する意見など一部を「全学数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」の Web サイトに公開している。

プログラム構成科目は、リテラシーレベルが「情報科学」「データサイエンス基礎」の 2 科目、応用基礎レベルが「情報科学」、「データサイエンス基礎」、「データサイエンス応用」、「数学基礎」、「代数学」、「統計学基礎」、「解析学」「プログラミング基礎」、「プログラミング応用」、「情報活用プロジェクト演習」、「情報処理演習(AI)」の 11 科目である。応用基礎レベル構成科目はリテラシーレベル構成科目を含むので、以下の表では応用基礎レベルの全体結果を示す。有効回答数は 451 である。

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
平均値	3.31	3.37	3.47	3.13	3.10	3.27	3.47	3.54	3.42
母標準偏差	0.65	0.69	0.71	0.72	0.81	0.72	0.68	0.70	0.75

まず、「授業目標の達成度 (Q1)」と「授業方法 (Q3)」をみると、前者は平均 3.31、後者は 3.47 であり、教員の目指す教育水準と学生の目から見た授業目標の達成度に大きな乖離はないものと推察できる。「授業方法 (Q3)」の数値が他の項目に比べて高いことは、授業で提供している資料や教材が学生に受け入れやすくなっている科目が多いことを示唆するも

のである。

次に、「意欲的受講 (Q2)」は 3.37 と良好な結果になっており、学生が学ぶ意識をもって授業に臨んでいたことがわかる。また、「後輩学生への推奨度 (Q6)」も 3.27 となっていることから、情報科目群はおおむね授業に対する好印象がもたれているといえるのではないかとと思われる。

情報系科目ではハイフレックス型の遠隔授業が多いが、遠隔授業関連の質問項目である「遠隔システム活用 (Q8)」が 3.54 と特に高く、また、「遠隔授業の効果 (Q9)」は 3.42 となっていることから、多くのハイフレックス授業は特に問題なく行われているものと解釈することができる。

一方、「内容理解 (Q4)」や「興味・関心 (Q5)」をみると、それぞれ、3.13 と 3.10 になっており、他の項目に比べて評価が低めに出ている。また、両者とも標準偏差が大きいことから、科目間の難易度の違い、あるいは学生の理解度・関心度の個人差が影響して、かなりばらつきがあることがわかる。これは、数理系科目と DS・AI 系科目の特性の違いが一因になっているのかもしれない。

最後に「総合評価 (Q7)」をみると、3.47 と、まずまずの結果が得られており、全体として一定程度、授業に対する満足感が現れていることが確認できた。個別の授業に関する授業内容や授業方法に関して様々な意見があったが、総じて良い印象をもたれていることから、本年度については、ひとまず、うまくいっているとみてよいだろう。引き続き、今後も学生の理解をさらに深め、より一層、学問への興味を引き出す工夫をすることで、魅力的な授業に改善していき、学生の声に率直に耳をお傾ける努力を続けていかねばならない。

2.6.2 FD 活動

情報センターで今年度を実施、参加した FD 活動を以下に挙げる。

・数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム北信越ブロック 第 6 回シンポジウム「数理・データサイエンス・AI 教育に係る高大接続の取組み紹介」

日程：2025 年 8 月 29 日

場所：Zoom によるオンライン開催

主催：北信越ブロック代表校 金沢大学数理・データサイエンス・AI 教育センター

参加教員：徳野 淳子

・業務を 1/2 にする生成 AI 福井県大セミナー

日程：2025 年 7 月 14 日、7 月 15 日

場所：福井県立大学の対面、Zoom によるオンラインでの開催

主催：情報センター

主催者：村田 知也

参加教員：徳野 淳子、眞田 嵩大

・福井県大生成 AI 活用セミナー 中級編 AI に働かせるやり方

日程：2024 年 11 月 10 日、11 月 11 日

場所：福井県立大学の対面、Zoom によるオンラインでの開催

主催：情報センター

主催者：村田 知也

参加教員：徳野 淳子、眞田 嵩大

・数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム北信越ブロック 第 7 回シンポジウム「北陸観光 DX による MDASH 教育の深化」

日程：2026 年 1 月 30 日

場所：金沢市文化ホール大集会室・Zoom によるオンライン開催

主催：北信越ブロック代表校 金沢大学数理・データサイエンス・AI 教育センター

参加教員：徳野 淳子

・情報処理技術者試験の見直しに関するオンライン説明会

日程：2026 年 2 月 26 日

場所：Zoom によるオンライン開催

主催：経済産業省

参加教員：徳野 淳子

・数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム 2025 年度総会

日程：2026 年 3 月 19 日

場所：Zoom によるオンライン開催

主催：数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム事務局 東京大学数理・情報教育研究センター

参加教員：徳野 淳子

2.6.3 授業改善の取り組み

今年度は授業改善について以下のような取り組みが行われた。

科目名：ICT リテラシー

担当教員：徳野 淳子

授業改善の取り組み：新カリキュラムの開始に合わせ、昨年度までの「情報基礎演習」の内容を一新し、他の担当教員と協力して教材の更新や作成を行った。2025 年度に初めて高等学

校で「情報Ⅰ」を履修した学生が入学することを踏まえ、昨年度に続き、情報プレースメントテストを用いて新入生の能力調査を行い、過年度までの結果と比較した。

科目名：情報科学

担当教員：徳野 淳子

授業改善の取組み：例年実施しているゲストスピーカー講義の他、経済学部クラスにおいては、福井県産業情報センターで開催された「クマンドウデジタルアライブ 2025」（主催：（公財）ふくい産業支援センター）に参加した。これにより、産業界における AI の活用状況や、インフルエンサーなどの多様な職業の在り方など、講義内容の実社会での応用について学ぶ機会を設けた。

科目名：情報技術者（国家試験Ⅰ）

担当教員：徳野 淳子

授業改善の取組み：対面と Zoom によるハイフレックス型で実施したことを踏まえ、学生が質問しやすい環境を整えるため、Zoom および Google フォームに質問箱を設けた。寄せられた質問に対しては、Classroom 上での回答や、次回の授業で補足説明を行った。

科目名：メディア情報リテラシー

担当教員：徳野 淳子

授業改善の取組み：生成 AI によるディープフェイクやダークパターンなどの最近の問題を取り上げ、学生の関心を高めるよう工夫した。また、学生自身がニュースを制作し、その内容を相互に確認する演習を通して、情報の受け取り手による評価の視点の違いや多様性、現在のニュース報道の在り方について理解を促した。

科目名：情報活用プロジェクト演習

担当教員：村田 知也

授業改善の取組み：PBL 授業の一環として、Cluster を活用したメタバース空間での演習を実施した。学生はアバターを用いて仮想空間に参加し、グループごとに課題について議論を行った。対面とは異なる環境により、発言のしやすさや視覚的共有の工夫が見られ、主体的な参加が促進された。また、場所に依存しない協働の可能性や、デジタルコミュニケーションの特性について理解を深める機会となった。今回の実践を通じて、メタバースの教育活用の有効性が確認できた。

科目名：代数学・解析学・統計学基礎

担当教員：田中 武之

授業改善の取組み：授業時間内に課題演習の時間を設け、個別に質問対応にあたるなどして、

各回の授業内容が身につけられるように配慮した。定理の解説にあたっては、できる限り具体的な数値例を用いて、過度に話が抽象的にならないようにした。数式の計算過程の説明では、どうしても板書による説明が必要になるので、見やすい板書になるよう、常に自己チェックしていきたい。

科目名：数学基礎(前期月2)

担当教員：谷川 衝

授業改善の取組み：授業の最後に演習問題を課して現在の習熟度を学生に認識させるようにした。また中間テストを実施して学生の習熟度を把握するように心を砕いた。

科目名：データサイエンス基礎(前期火2)

担当教員：谷川 衝

授業改善の取組み：学生が毎回自らの手を動かして課題を解くことによってコンピュータの操作が習熟し、データ解析の理解が促進できるようにした。そのために、課題を短い時間で説明するのではなく、学生が質問しやすいように、一々説明を止めて学生から質問を募った。また、学部の教員と連携して学生に課題を課した。

科目名：情報処理基礎演習(前期水2)

担当教員：谷川 衝

授業改善の取組み：学生が毎回自らの手を動かして課題を解くことによってコンピュータの操作が習熟し、データ解析の理解が促進できるようにした。そのために、課題を短かい時間で説明するのではなく、学生が質問しやすいように、一々説明を止めて学生から質問を募った。また、福井県の社会人を講師として招待して、福井県の産業界と学生とのつながりを促進した。

科目名：データサイエンス基礎(前期木2)

担当教員：谷川 衝

授業改善の取組み：学生が毎回自らの手を動かして課題を解くことによってコンピュータの操作が習熟し、データ解析の理解が促進できるようにした。そのために、課題を短かい時間で説明するのではなく、学生が質問しやすいように、一々説明を止めて学生から質問を募った。また、学部の教員と連携して学生に課題を課した。

科目名：物理学 I(前期木3)

担当教員：谷川 衝

授業改善の取組み：授業の最後に演習問題を課して現在の習熟度を学生に認識させるようにした。また中間テストを実施して学生の習熟度を把握するように心を砕いた。

科目名：情報処理基礎演習(後期火 3)

担当教員：谷川 衝

授業改善の取組み：学生が毎回自らの手を動かして課題を解くことによってコンピュータの操作が習熟し、データ解析の理解が促進できるようにした。そのために、課題を短い時間で説明するのではなく、学生が質問しやすいように、一々説明を止めて学生から質問を募った。また、専門的な研究会に参加をさせて、高度な学問活動に触れさせた。

科目名：数学基礎(後期木 3)

担当教員：谷川 衝

授業改善の取組み：授業の最後に演習問題を課して現在の習熟度を学生に認識させるようにした。また中間レポートを実施して学生の習熟度を把握するように心を砕いた。

科目名：物理学 I(後期金 1)

担当教員：谷川 衝

授業改善の取組み：授業の最後に演習問題を課して現在の習熟度を学生に認識させるようにした。また中間レポートを実施して学生の習熟度を把握するように心を砕いた。

科目名：データサイエンス応用(後期金 4)

担当教員：谷川 衝

授業改善の取組み：学生が毎回自らの手を動かして課題を解くことによってコンピュータの操作が習熟し、データ解析の理解が促進できるようにした。そのために、課題を短い時間で説明するのではなく、学生が質問しやすいように、一々説明を止めて学生から質問を募った。また、学部学生の要望に応じて、セグロジャッカル CT 画像をインタラクティブな 3 次元画像としてデータ処理するという課題を行った。

2.7 国際センター（渡邊 綾）

国際センターは本学における 1. 語学教育（英語に関する必修・選択科目および英語・その他外国語の選択科目）、2. 海外留学・研修プログラムの提供、そして 3. 学内における多文化理解の促進を主たる目的として、2025 年 4 月に開設された。このうち語学教育、特に英語科目については、2025 年度のカリキュラム改編を受け、1 年次必修科目として、あらゆる分野に応用可能な基礎力の育成を目的とした英語 A～D を開講した。また、学生の英語力を客観的に測定し、その変化を把握するため、TOEIC Bridge を年に 2 回実施した。さらに、選択科目として英語発展 I～VI を開講し、グローバル時代に求められる実践的な英語運用能力の育成を目的とする授業を、対面および遠隔（永平寺キャンパス以外の学生向け）で実施した。英語以外にも、中国語、韓国朝鮮語、ドイツ語、フランス語、ロシア語を開講している。以下では、これらの語学科目について、2025 年度の授業評価アンケート、授業公開、及び授業改善の取組、および今後の展望について記す。

2.7.1 授業評価アンケート

国際センターにおける 2025 年度の授業評価アンケートの実施科目数は、前期 51 科目、後期 42 科目であった。非常勤講師が担当する科目も多い中、アンケート実施率は前期 85.0%、後期 85.7%であり、ほとんどの科目で授業評価アンケートが実施されたといえる。多くの教員は、学生からの自由記述に対して具体的な改善方法を提示するなど、丁寧に対応している。

新設のセンターのため、経年変化をみることはできないが、全ての項目及び総合評価において、前期の平均値が後期を上回った（総合評価：前期 3.56、後期 3.47）。他のセンターとの比較では、前期には大きな差は見られなかったものの、後期にはやや低い傾向がみられ、本センターの授業改善に向けた検討の余地があることが示唆される。全学平均との比較においても同様に、前期では平均値との差はほぼ見られない一方、後期では各項目で平均を僅かに下回る傾向があった。（図 1 参照）もっとも、必修科目と選択科目では、履修者数や授業内容が異なり、さらに対面授業と遠隔授業という実施形態の違いもあるため、アンケート結果をセンター間で単純に比較することは難しい。今後も、基礎力の向上を目指す必修科目と、実践力の育成を目指す選択科目の双方において、学生にとって魅力ある授業を展開できるよう、センター教員全体で授業改善に取り組んでいきたい。

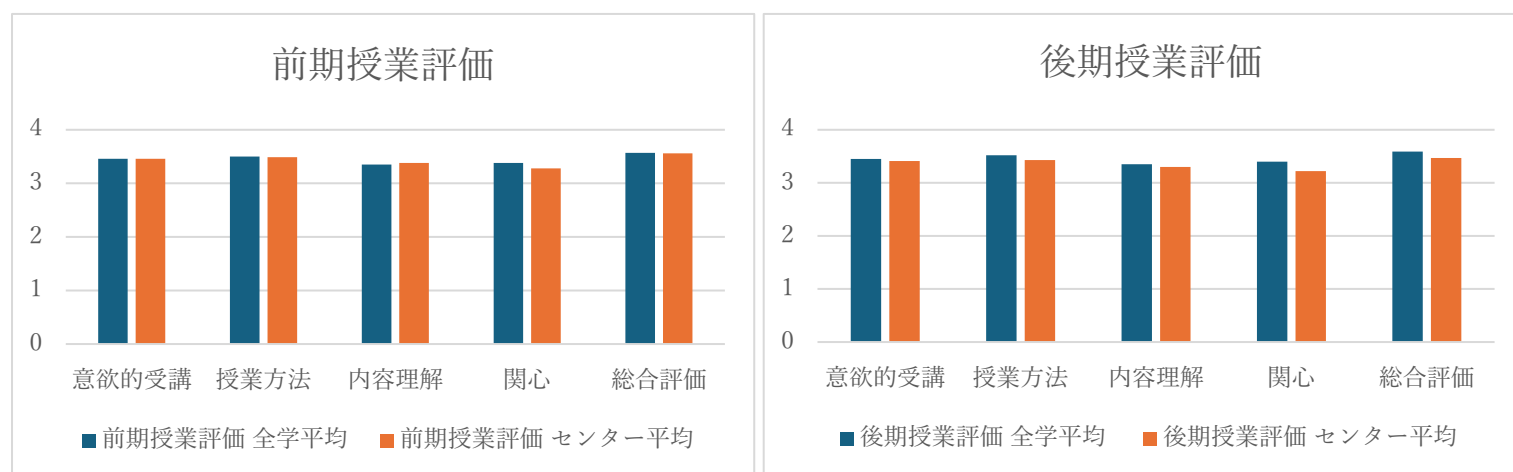


図 1：2025 年度実施の前期および後期の授業評価アンケートの全学と国際センターの結果の比較。

2.7.2 授業公開

国際センターでは、以下の講義において、各教員が個別に授業参観を実施し、授業方法や授業内容に関する情報共有を行った。

科目名：海外語学研修（英語）

担当教員：ジャレット・デンマン

公開日時：2025 年 10 月 16 日、ワールドカフェ

内容：履修生の短期海外研修報告会に参加

参加教員：3 名（森、ヨコタ、渡邊）

2.7.3 授業改善の取組と今後の展望

2025 年度は授業改善について、以下のような取組を実施した。

担当教員：森 英樹

科目名：担当科目全般

授業改善の取組：Google Classroom を活用した課題提出と教材提供により学習の利便性を高め、ペーパーレス化に努めた。一部のクラスでは、業者の e ラーニング教材を取り入れ、レベルに応じた教材の可能性を探った。

担当教員：ヨコタ ミヨ

科目名：英語 B（看護）、英語 IIb（海洋）、英語発展 IB、英語 D（創農）

授業改善の取組：アメリカのテネシー大学（前期 英語 II b）、フィンドレー大学（前期 英語 B）、ウスターポリテクニク大学（後期 英語発展 I B・英語 D）の学生が県立大学に訪問した際に英語のクラスに参加してもらい、日本人学生と交えてトピックに基づいた英会話を行った。

科目名：英語発展 IA（前期 対面授業）

授業改善取り組み：増永眼鏡株式会社（福井市）からマレーシア新入社員 2 名を招待して日本で外国人として働くこと、日本の大学で体験したプラスマイナス点などをプレゼンテーションしてもらい、日本人学生と discussion をおこなった。

担当教員：ジャレット デンマン

科目名：担当科目全般

授業改善の取組：新しいカリキュラムに準じた資料や試験などをゼロから用意し、対象の学生に合わせてそれぞれの授業の内容を工夫した。

担当教員：渡邊 綾

科目名：担当科目全般

授業改善の取組：全担当科目で中間アンケートを実施し、学期途中でも学生の声に基づき授業改善を行った。後期の英語発展 VIB や英語 Ia（海洋）では、学生が最後に行う英語プレゼンテーションに福井県の国際交流員に参加してもらい、質疑応答を行った。

国際センターにおける今後の FD 活動としては、来年度新たに着任する教員も含め、各教員の授業実践や指導上の工夫について継続的に共有し、相互に学び合う機会を定期的に設けることが重要である。授業評価アンケート等を通じて、学生の意見を継続的に把握しながら、国際センター全体として教育の質の向上に取り組んでいく。

2.8 地域連携センター・共通教育センター（木村小夜）

2025 年度、本学における一般教育の実施体制は大幅に再編された。ここでは地域連携センターと共通教育センターについて報告する。地域連携センターは教職課程および地域連携に関わる教育を担い、共通教育センターは英語・情報を除く一般教育科目を担っている。

本報告では、これら両センターにおける FD の取り組みを組織横断的な観点から整理・分析する。これは、教育の質保証および授業改善の取り組みが個々の組織の中で閉じるものではなく、大学全体として統合的に推進されるべきものであるという認識に基づいてのことである。

2.8.1 授業評価アンケートの結果

上述の通り、地域連携センター・共通教育センターは改組の結果、2025 年度より分割・名称変更された部局である。この組織改編により従来の学術教養センターからの経年比較が困難になったため、今回は 2025 年度の集計結果をまず提示する。

教職専任教員 2 名は 2025 年度より新設の地域連携センターに所属し、構成人数は 3 名である。また、共通教育センターには教職専門教員を除いた計 10 名で構成され、英語・情報以外の全学の一般教育を担っている。両センターとも、アンケート参加教員は非常勤講師を除いて 100% で、結果は表 1 および表 2 の通りである。

		集計数	Q1 意 欲	Q2 授業方法	Q3 内容理解	Q4 関 心	Q5 総合評価
前 期	全体	6194	3.46	3.50	3.35	3.38	3.57
	地域	211	3.54	3.59	3.55	3.56	3.65
後 期	全体	3498	3.45	3.52	3.35	3.4	3.59
	地域	136	3.57	3.43	3.38	3.45	3.51

表 1 授業評価アンケート結果集計（地域連携センター）

		集計数	Q1 意 欲	Q2 授業方法	Q3 内容理解	Q4 関 心	Q5 総合評価
前 期	全体	6194	3.46	3.50	3.35	3.38	3.57
	共通	1667	3.51	3.55	3.45	3.48	3.66
後 期	全体	3498	3.45	3.52	3.35	3.4	3.59
	共通	917	3.53	3.62	3.49	3.55	3.71

表 2 授業評価アンケート結果集計（共通教育センター）

以上より、2024 年度と 2025 年度の比較と傾向を確認する。

2024 年度までの学術教養センターの授業評価の経年推移は緩やかな右肩上がりを示していた。評価は多様な学生の判断によるものであってアンケート結果の数値を絶対化することはできないが、各教員による授業改善の取り組みが反映された結果である可能性がある。今年度は改組がなされたため、前年度までの学術教養センターからの経年変化を辿ることは難しい。ただ、地域連携センターでは全学平均を上回る高い満足度が維持され、共通教育センターでも前・後期共に各

項目はいずれも全体の平均を上回り、後期の総合評価は全部局中、最高値の 3.71 であった。教員数の減少に伴い、教員一人当たりの負担は増加しているが、授業評価は一定の水準を維持している。後に掲げるような各教員の創意工夫の結果と言える。

ただ、2024 年度は授業方法や総合評価が高い水準を維持していた一方で、「内容理解 (Q3)」は相対的に低い値にとどまる傾向が見られた。2025 年度においてもこの傾向は大きく変わらず、授業満足度の高さが維持される一方で、学習内容の理解促進に関する課題は引き続き重要な検討事項である。

なお、「遠隔授業の目的と効果を再定義する」必要性について、昨年度報告書（石原一成筆）に詳述されているものの、全学的な議論は十分に行われていない。学部・キャンパス数増加に伴い、遠隔授業の運用について各学部の事情のすりあわせや相互理解の共有が求められている段階である。

2.8.2 授業公開の方針と実績

地域連携センター・共通教育センターでは、学術教養センター時代より継続して授業を常時公開としており、教員間での授業参観を通じた授業改善の取り組みが行われてきた。これは互いの授業のやり方を学び、それを活用・相対化することで、自身の授業を改善するための貴重な機会である。しかし 2025 年度以降、時間割編成はごく一部の枠に多数の（あるいは同種の）一般教育科目が配置されるものに改変された。とりわけ各曜日の一限に集中する時間割とされたために、授業参観の機会は制約を受けている。授業改善のための相互学習の機会をどのように確保するかという観点からも、時間割のあり方は今後の検討課題である。なお、下記の「国際社会と法」のシンポジウムは土曜日に開催されたため、参観が可能となった。

また、従来開講されていたオムニバス形式の授業では、担当教員が自分の担当回以外の授業も参観することで、授業方法に関する情報を共有し、授業改善への関心を高める取り組みを行うことができた。しかし、カリキュラム改定に伴い、オムニバス授業は 2024 年度以降、廃止された。なお、2026 年度は「現代人権論」が唯一のオムニバス授業として開講される。

2025 年度の実績は以下の通りである（五十音順。以下同）。

(1) 授業公開

科目名：「国際社会と法」（2026 年 1 月 10 日）

担当教員：根田恵多

内容：授業内容と関連する書籍『合理的配慮と憲法』の刊行を契機として、刊行記念シンポジウムを開催し、授業の一環として学内外に公開した。当該授業の履修者に加え、学内の教職員や学生のほか、一般市民にも参加を呼びかけ、広く公開する形で実施した。

シンポジウムでは、書籍の内容や関連する法的課題について報告・議論を行い、参加者との間で活発な質疑応答が行われた。授業の履修者にとっては、講義で扱っているテーマについて研究者や参加者の多様な視点に触れる機会となり、授業内容への理解を深める契機となった。

科目名：「西洋思想」（2025 年 4 月 25 日 3 限）

担当教員：渡邊浩一

内容：龍谷大学心理学部の崔舜星准教授の授業参観があった

(2)授業参観

参観した教員：木村小夜・渡邊浩一

参観した授業：「国際社会と法」根田先生（2026年1月10日）

内容：根田先生の授業の一環として編著書『合理的配慮と憲法』刊行記念シンポジウムが公開された。各専門分野からの知見が紹介されたが、差別の問題と不可分であり、平等の捉え方、またハラスメント問題に近い難しさがあることなど、多くの教示を頂いた。土曜日に公開されたため参観が可能であった。

2.8.3 FD研修

授業方法の改善に関する以下のような講演会・シンポジウム等に、共通教育センターの教員が参加し、あるいは講師を務めた。

オンライン意見交換会名：第4回オンライン意見交換会「大学体育の将来を語る 4」Good Practiceに学び、大学体育を拓く～東海・近畿・九州支部の事例から～

主催：公益社団法人 全国大学体育連合

開催日：2025年9月22日

場所：オンライン開催

参加教員：石原一成

内容：全国大学体育連合8支部のうち東海・近畿・九州支部における特色ある実践(Good Practice)を共有し、各支部の活動の意義や価値について検討した。

講座名：福井工業大学スポーツ健康科学科主催公開講座「地域とスポーツ健康科学科で創る福井の未来－10年の歩みとこれから－」

主催：福井工業大学スポーツ健康科学科

開催日：2025年11月12日

場所：福井工業大学 福井キャンパス

参加教員：石原一成

内容：地域とスポーツが今後どのように関わっていくことが大切なのか、福井県や福井県内の市町と大学が共同して、ふくい活性化に向けた様々な活動を実行できるかについて検討した。

緊急公開シンポジウム 2025：教員養成における一般教養科目としての体育の役割と課題を考える

主催：一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

開催日：2025年12月20日

場所：ハイブリッド形式（対面会場：明治大学 駿河台キャンパス）

参加教員：石原一成

内容：教員免許取得のための必修科目として位置してきた体育について、社会の変化を踏まえながら、その意義や貢献、課題を学術的な見地から議論した。

オンライン意見交換会名：第5回オンライン意見交換会「大学体育の将来を語る 5」Good Practiceに学び、大学体育を拓く～関東・北陸支部の事例から～

主催：公益社団法人 全国大学体育連合

開催日：2026 年 1 月 22 日

場所：オンライン開催

参加教員：石原一成

内容：全国大学体育連合 8 支部のうち関東・北陸支部における特色ある実践（Good Practice）を共有し、各支部の活動の意義や価値について検討した。

フォーラム名：第 14 回大学体育スポーツ研究フォーラム

主催：公益社団法人全国大学体育連合

開催日：2026 年 3 月 16 日

場所：ハイブリッド形式（対面会場：札幌国際大学）

参加教員：石原一成

内容：「e スポーツの現状と大学でのあり方」「ドーピング防止教育教材普及について」などについての話題が提供され、大学体育・スポーツ教育のより良い実践について議論を行った。

タイトル：FD 研修「読書会の仕方を教える授業」

主催・場所：京都女子大学現代社会学部

開催日：2025 年 12 月 24 日

研修講師担当教員：渡邊浩一

2.8.4 授業改善の取り組みと今後の展望

2025 年度は授業改善に向けて、以下のような取り組みが各教員によって行われた。基本的に 2026 年度時点での両センター所属教員について掲げるが、情報提供のあった教員（現・他部局所属）の情報も挙げることにした。

・地域連携センター

科目名：担当科目全般

担当教員：國崎大恩

授業改善の取り組み：

1. 授業改善の基本方針

教職課程専任教員として「教師論」「教育史」「教育原理・教育課程論」「教育実習」「道徳教育の理論と実践」等を担当している。いずれの科目においても、文部科学省が定める教職課程コアカリキュラムに準拠した授業内容を構成し、学校教員として最低限必要な知識・技能の確実な習得を第一の目標としている。

あわせて、小学校現場での実務経験を生かし、習得した知識が実際の教育場面においてどのように機能するかを具体的に示すことを意識している。学生が「知識を学ぶこと」と「教師として働くこと」を切り離さずに捉えられるよう、キャリア形成を見通した授業構成を継続的に試みてきた。

2. 今年度の主な取り組み

(1) ゲストスピーカーの招聘による授業の深化（「教師論」）

今年度の「教師論」では、授業内容を学校現場の実情と結びつけて理解させることを目的に、外部のゲストスピーカーを招聘した。

一人目は、大阪市等においていじめ等に関する第三者委員会の委員も務める弁護士の坂東大士氏である。いじめ問題の法的・制度的側面について専門家の視点から講じていただくことで、教師が直面しうるリアルな課題を学生が具体的に認識する機会となった。教員としての責任と対応の在り方について、テキストの学習だけでは得られない実践的な示唆を与えていただいた。

二人目は、福井県教育庁において教職の魅力発信に取り組む増山温子氏である。教育行政の立場から見た教師像や教職の意義、地域における教育の現状について語っていただき、学生の職業的アイデンティティの形成や進路意識の涵養に資するものとなった。

これらのゲスト講義を通じて、学生が多様な視点から「教師という職業」を捉え直すきっかけをつくることができたと考えている。

(2) フィールドワークの実施による体験的学習（「教育史」）

「教育史」の授業においては、福井県立こども歴史文化館および教育博物館へのフィールドワークを取り入れた授業を実施した。実物資料や展示に直接触れることで、教育の歴史的変遷を身体的・感覚的に理解する機会を設けた。講義で学んだ内容と実物資料を照合・確認する作業を通じて、歴史的知識の定着と思考の深化が促されたと考えている。また、地域に根ざした教育文化への関心を高めるという点でも一定の効果があつたと評価している。

3. 今後の展望

引き続き、コアカリキュラムに基づく基礎的・体系的な知識の指導を堅持しつつ、以下の点を中心に授業改善を進めていく。

第一に、学校現場との連携をさらに充実させることである。今年度のゲストスピーカー招聘の取り組みは学生からの反応も良く、授業の深みを増す上で有効であった。今後も多様な立場の実践者・専門家との連携を模索し、学校現場の「今」を取り込んだ授業づくりを継続したい。

第二に、フィールドワークや体験的活動の充実である。「教育史」に限らず、他の科目においても実際の学校や地域との接点をもつ機会を積極的に設けることで、理論と実践の往還を意識した学びの場を構築していきたい。

科目名：担当科目全般

担当教員：黒田祐二

授業改善の取り組み：学生の人間や教育に関する見方や視野ができるだけ広がるように努めている。また、毎回演習の時間を設け、講義テーマについて自分で考えることや、他者の考えに触れて自分の考えを広げたり深めたりすることを促している。

・共通教育センター

科目名：体育実技Ⅰ・体育実技Ⅱ

担当教員：石原一成

授業改善の取り組み：教員がウォーミングアップや練習方法を提示する学習活動から、学生主体の学習活動に発展させていくよう配慮している。具体的にはチームごとに設定したその日のリーダーを中心にウォーミングアップ、チーム練習、グループワーク等の学習活動を行い、リーダーシップ、フォロワーシップ、サポーターシップについて考え、実践する機会を提供している。毎

回、受講生は学習活動の記録（自己評価、次週の課題、戦術、学び、感想など）を行い、教員がコメント・アドバイスを記入しフィードバックを行い、双方向授業の基礎づくりを行っている。

科目名：ジェンダー論・社会学（前期・後期）・現代家族論（前期）

担当教員：加藤まどか

授業改善の取り組み：昨年度までのやり方を継続し、対面で、空欄を設けた資料を配布し、受講者が重要な語句などを書き込みながら解説を聞くというやり方で実施した。資料には、グラフや表、画像や新聞記事などを盛り込み、回によっては動画を視聴するなどして、受講者の関心が高められるようにした。今年度から授業数が増え、合計の受講者数も増加したが、受講後に授業内容への意見や感想等を Google フォームに投稿してもらい、次回の授業時に教員からのコメントを伝えることで、少しでも相互のやり取りができるようにした。来年度以降も、こうしたやり方を継続していきたい。

科目名：現代家族論（後期）

担当教員：加藤まどか

授業改善の取り組み：後期の現代家族論は、ハイフレックスで実施し、永平寺キャンパス（約 150 名）は対面で、小浜キャンパス等（約 50 名）は Zoom リアルタイムで行った。対面の受講者には印刷資料を配布し、GC には同じ資料を掲載した。Zoom で資料を画面共有し、教室ではパソコンの画面をスクリーンに映して、空欄の言葉を書き込みながら、解説を進めた。グラフや表、画像や新聞記事なども、適宜、画面共有して理解しやすいように工夫した。動画の視聴は、Zoom 上では難しかったため、遠隔での受講者には、GC に掲載したリンクに各自でアクセスして視聴してもらうようにした。授業の最後には、授業内容に関わる課題を出し、受講者が回答を Google フォームで投稿するようにした。

今年度は初めてハイフレックスで授業を行い、操作に手間取ったことがあったため、来年度以降はより円滑に進められるようにしたい。

科目名：導入ゼミ

担当教員：加藤まどか

授業改善の取り組み：初めに共通テーマとしてのケアに関わる問題について解説した。読みやすい入門書を全員で読み、グループワークで意見を言い合い、全体で話をして理解を深められるようにした。

その後は、資料の収集、主題の絞りこみ、問いの展開、目標規定文の作成、文献ノートの作成、仮の目次の作成等の課題を順に行って、各自が報告をまとめていけるように授業を進めた。後半はそれぞれの報告と質疑応答を行い、最後に報告したテーマで期末レポートを作成してもらった。

今年度は 2 クラス担当で、それぞれのクラスの受講者数も多かった。来年度も今年度のやり方を継続して行う予定だが、受講者数が少し減るため、各段階での課題への応答を、より丁寧に行っていきたい。

科目名：教養ゼミ

担当教員：加藤まどか

授業改善の取り組み：今年度の前半は、子どもの権利、児童養護施設や里親等での社会的養育、児童虐待、放課後児童クラブ等について、資料をもとに解説した。また子どもの発達過程や子どもへの支援について学ぶために、放課後児童クラブに伺って子どもとの活動を実施した。活動後の振り返りでは、支援員や自分自身の子どもの関わりについて、また子どもたちの様子について、様々な気づきがあったことが報告された。また子どもたちが上手に遊べるように工夫する過程で、大学生の参加者同士のコミュニケーションが深まる良い機会になったという感想も寄せられた。

後半は、それぞれが関心のあるテーマについて報告し、報告後に、皆で質問をしたり、意見を言い合ったりして学びを深めた。授業終了後には、それぞれの報告へのコメントを Google フォームに投稿してもらい、次の授業時までには全員のコメントを GC に掲載して振り返ることができるようにした。

今年度から 2 クラスで授業を行うようになった。今年度は、12 月の最終授業日が小学校の終業式の日と重なり、子どもたちの放課後児童クラブへの来所時間が早かったため、クラスごとに放課後児童クラブを訪問することができた。来年度以降も、今年度のやり方を継続し、放課後児童クラブ訪問も実施したいが、日時の調整が課題である。

科目名：教養ゼミナール（野生動物と地域社会）

担当教員：加藤裕美

授業改善の取り組み：美浜町新庄地区でのフィールドワークを実施し、狩猟、鳥獣害対策、ジビエの利用、鹿肉の有効活用などについて地元の猟師らと意見交換をおこなった。福井県猟友会など、ゲスト講師による授業を行うことにより、多様な視点から野生動物と人間の関係を理解できるように工夫した。フィールドワークの様子が県民福井新聞に掲載された（2025 年 11 月 18 日県民福井新聞 5 面「猟師に県立大生新ビジネス提案―美浜で獣害対策授業」）。

科目名：観光学

担当教員：加藤裕美

授業改善の取り組み：地域の観光事業者を招いたゲスト講義や、学生自身によるフィールドワークを重視した授業をおこなった。講義科目の中でも、グループディスカッション、調べ学習、ポスター発表など、アクティブ・ラーニングを数多く取り入れた授業を実施した。ゲスト講義では、（株）JTB、ふくいエコ・グリーンツーリズム事務局、および森林楽校森んこ（おおい町）など、県内観光事業者から直接実情を学べる機会を設けた。フィールドワークでは、永平寺、あわら温泉、東尋坊など県内 20 か所の観光地で学生がグループなどでフィールドワークを行った。調べた結果をグループでポスターにまとめポスター発表を行った。

科目名：東南アジアの文化と社会

担当教員：加藤裕美

授業改善の取り組み：経済学部、看護福祉学部、海洋生物資源学部など、すべての学部の専門と関わるトピックを盛り込むことにより、学生の専門教育に生かせるように工夫をした。日本貿易

振興機構ジャカルタ事務所とオンラインでつなぎ、インドネシアから Zoom ゲスト講義をおこなった。また、福井県国際交流協会、国際協力機構北陸事務所、JICA 青年海外協力隊 0B、茱崎定置網組合、太田木材株式会社など、東南アジアとかかわりのある多彩なゲスト講師を招いたゲスト講義を行った。グループディスカッションの時間を取り、学生が積極的に問題意識を持てるよう工夫した。

科目名：東洋思想・東洋史・東洋の世界（講義科目）

担当教員：亀田勝見

授業改善の取り組み：昨年度以前から担当している「東洋思想」の授業スタイルを、新たに担当することとなった他の 2 科目でも踏襲した。

(1) 毎回作成するスライド資料では、適切な視覚効果と見やすさに注意を払い、動的な構成で興味を引きつける。

(2) 同時に、配布プリントでは授業の展開とともに空欄を埋めていく形とし、常に授業に意識を向けてもらえるような工夫を施す。

(3) 授業終わりの小課題（ミニツツペーパー）では、授業前半に出てきた重要語句や概念を答えさせる問題を加えることで、簡単ではあっても授業を理解していないと平常点が取れないようにする。

(4) 小課題に対する評価を GC 上に都度表示する際、特に必要な場合はフィードバックコメントも添える。これにより、早ければ課題提出当日にコメントを返すことができ、学生からも返答や再質問がきて有意義なやり取りが生じることもしばしばある。

(5) 学問的な内容を講義する一方で、それに関連する話題には現代の若者が興味を持つ分野の情報を絵や動画で紹介することも心掛けている。

次年度はいずれの科目でも今年度の内容を踏襲する予定だが、情報的に新しいものへ入れ替えるなどの微修正を施す。授業スタイル自体は基本的にほぼ完成されたものとなっていると自認しているので変更しない。

科目名：導入ゼミナール

担当教員：亀田勝見

授業改善の取り組み：昨年度までと同様、新 1 年生が身につけておくべき基礎スキルの養成に重点を置いている。利用する教材はほぼ毎年同じだが、学年暦が相違するため 2 週間空いてしまう際の授業内容や課題内容を調整したり、受講者数の変動によるグループワークのグループ数や発表者数の相違を踏まえて授業時間数を調整するなどの注意はした。

今年度の期末課題は、昨年度同様のグループ発表に加え、与えられた共通テーマに対してごく簡単な調べ物をした上で、簡易レポートを完成させる個人課題も加えた。これにより、大学生のレポート作法を習得し、他科目の期末レポートに対応できるようにした。

今年度の上記個人課題は、必ずしも全員が十分なレベルにまで完成できたとはいえない。次年度では、より早い段階から指導を始める予定である。

科目名：教養ゼミナール

担当教員：亀田勝見

授業改善の取り組み：導入ゼミナールの期末課題から一歩進んで、テーマの選択範囲をやや広くした上で、より大学生としてのレポートらしいレポートを作成できる能力を身につけることに注力した。導入ゼミナールよりも個人で進めるべき作業が増えたが、授業ではグループ内で互いに助言しながら完成度を高めていく方式とした。

東洋に関連した創作物をテーマに指定し、普段学生自らが見聞きしている音楽・小説・映画・テレビなどから題材を選べるようにした。これには、普通のテーマだと膨大な先行研究があって尻込みする学生が出ることを防ぐ目的もあった。

今年度が初めての科目だったので、反省点はいくつかある。思った以上に個々の学生に対する教員からの指導が多く、半年の授業ペース配分にやや失敗したこと、思ったほどグループ内でのチェック機能が働かなかったこと、テーマとして取り上げたい作品が、学生には思ったほど見つけやすくなかったことなどである。次年度は、今年度の経験と問題点を踏まえ、より学生自身で興味をもって積極的に課題を完成できるようにしたい。

科目名：文学概論・国文学史

担当教員：木村小夜

授業改善の取り組み：いずれも小教室での講義であったため、時々指名発問をして基本的な知識の理解度を確認しつつ授業を進めた。文学概論では授業内容に関わる昔のはやり歌を聴いて解釈するなど、90分間をいくつかのトピックに分けて構成。またいずれの科目でも数回小課題を出し、極力その時間中に回答例を紹介、解説を加えるようにした。なお、課題とは別に授業へのコメントを書いてもらい、個々に返信した。内容によっては授業で共有し、話題の拡充につないだ。

科目名：国文学

担当教員：木村小夜

授業改善の取り組み：オンデマンド授業で実施。資料は書き込み式とし、書画カメラを用いて対面授業に極力近い方法を採用した。期間中、数回の小課題を出し、次回分としてフィードバックの動画を作成、多様な回答があることとこちらで用意した回答例を示した。この時、文章の書き方、受験勉強とは異なる〈問い〉に対する考え方（特に人文系においては問いへの答え方にはかなり幅があり、自分の中で問いの形を変えて考え直すことも可能であること）なども説明した。課題とは別に、毎回書いてもらう感想には個々に返信をした。

科目名：導入ゼミナール

担当教員：木村小夜

授業改善の取り組み：レポートの構想から完成までの流れを、半年間かけて極めて原始的（直筆中心）な形で体験してもらった。とりわけ、生成AIに依存せぬよう、レポート構想は書面で図示するなど、思考過程の表出と試行錯誤に力点を置いた。他方、グループワーク等も取り入れた。今年度から抽選制がなくなったが、一定の長さの文章を読み、自力で自分の考えを書く、という大学で不可欠のスキルを身につけるためには、考察対象への動機づけは不可欠であり、それが今後の課題である。

科目名：教養ゼミナール

担当教員：木村小夜

授業改善の取り組み：近代文学の原典と現代文学の翻案の比較を行った。1回目は全員で意見や疑問を出し合い、2回目はこれを参考としてグループ発表と質疑の時間とした。自発的な発言を促すために、最初の段階で評価基準を提示した。

科目名：担当科目全般（講義科目とゼミ）

担当教員：根田恵多

授業改善の取り組み：講義科目においては、学生の主体的な学習を促すため、Think-Pair-Shareと呼ばれる協働学習の手法を取り入れ、アクティブ・ラーニング型の授業運営を行っている。また、毎回の授業で小課題を課し、提出された内容については次回の授業冒頭で回答例を紹介しながら講評を行うなど、授業内でフィードバックを実施している。これにより、学生が自らの理解状況を確認し、学習内容の定着を図ることを意図している。

ゼミでは、裁判所見学や裁判傍聴を実施し、講義内容と実務との関係を具体的に理解できる機会を設けている。座学にとどまらず、実際の法廷の様子を観察することで、学習内容への理解を深めることを目指している。

科目名：英語 A～D、英語 IIb

担当教員：長岡亜生

授業改善の取り組み：1年次生対象必修英語科目。新たな大人数授業では、能動的な参加を促すため、オンラインでその場で問いに回答させるほか、学生同士での活動を取り入れ、マイクを回して学生に解答や発言の機会を与えた。さらに授業前後のオンライン課題を通して学生の理解度を把握し、到達度や誤答傾向を授業に反映させ、指導に生かした。中規模の授業では、ペアワークやグループワークを多く取り入れ、英語の発話を促し、学習した語彙・表現を運用する機会を設けた。

今後は、大人数授業においても学生同士で活動する機会を増やし、評価方法についてさらに検討したい。

科目名：英語発展 IVA, IVB

担当教員：長岡亜生

授業改善の取り組み：文学作品や映画を用いて英語を学ぶ選択科目。遠隔授業（2年次生以上対象）では、リアルタイムでの参加を促し、チャット機能やオンラインフォームを活用して双方向的なやりとりをおこない、授業前後の課題を通して理解状況を把握しながら授業を進めた。また、記述課題に加えて音読データも提出させることで、個々の習熟度を把握し指導に生かした。対面授業では、受講生の発話を促し、グループでの意見交換や活動を通して、各々の理解を深めさせた。

今後は、遠隔授業においても学生どうしの活動ができるように工夫し、他キャンパスでの試験実施方法や、試験以外での評価方法について検討したい。

科目名：全般

担当教員：渡邊浩一

授業改善の取り組み：

- ・25年度からのコマ数負担増への対応で手いっぱいであった。
- ・特に各学期連続2コマ担当となった初年次ゼミに関しては、「少人数教育」の理念（の取り上げ？）の明確化を求めたい。
- ・26年度から、1科目ずつ講義科目の内容の改訂・刷新を図っていきたい。

冒頭でも述べた通り、2025年度は本学の一般教育にとって大きな転換点となった。組織の分割による教育体制の再編、カリキュラム改訂によるオムニバス授業の原則廃止や時間割改変により、教育環境は大きく変更された。これにより教員の業務負担は増大したにもかかわらず、授業評価アンケートの結果は高い水準を維持している。各教員がオンデマンド資料の充実、アクティブ・ラーニングの導入、ゲストスピーカーの招聘など、質の高い授業を持続的に提供するために創意工夫を重ねた結果と言える。

ただ、個々の教員の努力結果である数値の高さを以て、2025年度以降の教育体制再編そのものを全面肯定できるわけではなく、今後の課題も明確になっている。以下、全学的議論をも喚起すべき一般教育における課題を挙げて結論としたい。

第一に、「単位の実質化」と学外学修時間の確保である。2025年度からは、従来の1単位科目を「予習・復習を重視した内容」とする2単位科目に移行させるという大胆なカリキュラム改定が実施された。大学設置基準に基づき、1単位あたり45時間の学修時間が必要であるという原則は不変であるため、「単位の実質化」や「学位の質保証」、学生の「授業外（学外）学修時間」をいかに確保し増加させるかが、両センターに共通する最重要課題となっている。学生が主体的に予習・復習に取り組めるよう、LMSの活用や課題設計のさらなる効率化・高度化が求められる。併せて、レポートや提出課題作成と生成AI使用に関する教員間での情報共有も必要となろう。

第二に、遠隔授業の再定義と教育的成熟である。遠隔授業はもはや緊急避難的な「対面授業の代替」ではなく、個別最適化された学習や反転学習といった遠隔ならではの価値を重視した授業設計へと昇華させる必要がある。これには個々の教員の努力に加え、全学的な議論と支援体制の整備が不可欠である。

第三に、組織的なFD活動の維持と強化である。オムニバス形式の授業は一般教育履修によって専門外のどのような分野を本学で学べるか学生に知ってもらうための貴重な初年次教育導入の場であったにもかかわらず、廃止された。学生にとってもオムニバス授業は、各専門分野の幅の広さと奥深さ、分野間の関連性——これらは専門学校ではなく大学で学ぶことの醍醐味に他ならない——をひとわり知ることのできる貴重な機会であったはずである。このオムニバス授業の廃止ならびに時間割の1限集中化により、教員間での授業参観や情報共有は物理的に困難となった。今後は、土曜日開催のシンポジウムの活用やデジタルツールを用いた事例共有など、新たな形態での相互研鑽の仕組みを構築していく必要がある。

と同時に、単位数の変更や授業の改廃、授業方法の改変といった教育の質に関わる大きな問題については、一般教育の役割、あるいは一般教育と専門教育の係に鑑み、実質的な議論が必要である。例えば、上記「授業改善の取り組み」でも指摘されているが、教員数の削減（非補充）や導入ゼミ抽選制廃止などに顕著に表れているように、本学が開学時より重視してきた「少人数

教育」は放擲されたのか。こうした制度上の変更は、日々の授業を行いその実情を最もよく知る一般教育担当教員当事者の責任においてなされたのか。今後の一般教育の見通しをどこが担っているのか。その組織的体質は問い続けられるべきである。

共通教育センターと地域連携センターは、担う役割こそ分かれたものの、「入学直後の学生の特性を把握し、社会情勢に応じた柔軟な教育を展開する」という共通の使命を持っている。組織分割後も、各組織が連携して互いに情報交換をし、2025年度までの実践で得られた経験を糧に、学生の特性に応じた教育運営、本学における教育の質保証とさらなる発展に向けて、可能な限り継続的な改善に取り組んでいく。

ファカルティ・ディベロップメント報告書 2025

発行年月 2026 年 3 月

編集・発行 福井県立大学 F D 部会